

# 芦峯ガイドの系譜

五十嶋 一晃

## 1. はじめに

富山県中新川郡立山町芦峯寺集落は、かつて近代登山における多くの優れた山案内人を輩出した。日本登山史に名を連ねた芦峯ガイドの起源は、立山登拝登山の案内人であった中語に遡る。中語は江戸時代の後半からはじまり、宿坊の衆徒（僧侶）に代わって、神仏の心を立山登拝者に伝え、登拝者の願いを神仏に伝える役目であった。具体的には立山縁起にもとづいた故事・伝説や立山の宗教的由来を説き、岩峯寺から芦峯寺を經由して室堂平に至る禅定路（登山道）には、尾張藩をはじめ全国の信者から寄進された「西国三十三番札所観世音菩薩霊場」の石仏を説明しながら、安全に雄山の峰本社へ導く任務であった。したがって中語は単なる山案内人や強力という職務とは異なった、立山特有の文化を形成している。

中語は明治中期には芦峯寺 80 人、岩峯寺・宮路 40 人、上滝 30 人の計 150 人に制限された。それが中語としての誇りを培養させ、登山案内という職務そのものが、登拝登山者との心地よい接し方を身につけさせた。つまり中語は特別な例外を除き“お客さま”との好ましい人間関係の構築方法を自然に習得したともいえよう。この習性は中語のみではなく、宿坊においてもきめ細かい接遇が行われた。芦峯の衆徒が布教活動を行っている全国各地の檀那場、つまり各宿坊は立山信仰登山を勧誘する檀那場廻りを行うが、それぞれ布教を担当する地区が決まっていた。その担当地区である檀那場から立山登拝にやってくる参詣者を「どうしゃしょう道者衆」と称して、その檀那衆が宿坊に着いて玄関に入ると、まず洗足タライに湯を注ぐことから始まる。下山の時には「チカ迎え」といって、芦峯特有の料理であるツボヤカツルと称する山菜と野菜の煮物を重箱に詰めて、芦峯から 5 km 山へ入った藤橋まで持参し、そこで道者衆を出迎えた。坊の衆徒と師檀関係がない一般の参詣者を「まいれんしょう参道衆」と呼んだが、両者の接遇には違いはあったにせよ、総じて参詣者には丁重をきわめ、集落あげて歓

待した。

中語やその後の芦峯ガイドは、夏の稼働期が過ぎると農業・炭焼き・柚にいそしみ、山菜採りなどで生活の糧を求めた。育苗植林も行った。毎年 10 月頃から衆徒の諸国配礼檀那場廻りに、従者として同行した中語もいたが、多くは積雪期に深雪をかき分けて山々を歩き回り、ヤリや村田銃によって狩猟を行った。それ故、富山県では芦峯が猟師の一番多い集落であった。狩猟の経験によって雪山の登降要領や生活技術、雪崩の予知などを体得するとともに、獲物、特にクマと戦う闘争心が養われる。これらの経験が近代登山案内人の素地となり、山峡の難所や雪山を先導する心・技・体が育成されて、多くの素晴らしい登山記録の樹立に大きな貢献を果たした。

そして芦峯ガイドとその関係者による婚姻関係によって、集落全体が深い絆で結ばれ、山案内人として大切な知識・技術・経験が伝承され蓄積された。

中語の立山登拝者に対する接遇の習性が、近代登山の案内人である芦峯ガイドに継承されたことと、芦峯ガイドは概して姓が「佐伯」と「志鷹」であることから、のちの近代登山案内人の登山記録に、姓名や親族関係に混乱を招く要因となる。

したがって近代登山の史料として、正しい「芦峯ガイドの系譜」を備え置くことが極めて肝要なことであり、真の日本の登山史を理解するためには必要不可欠なものといえよう。

本文や系譜で使用している、まぎらわしい用語の意味と使い分けについて、あらかじめ凡例的に説明を加えたい。

- (1) 芦峯寺と称する地名は、明治期のはじめまでは加賀藩の厳命によって、寺名から「芦峯寺」と名付けられた。その後、明治維新の廃仏毀釈によって、立山方面のすべての名称が仏教的色彩を取り除くこととなる。地名の芦峯寺も「寺」を除き「芦峯」となる。しかし、日本最古の山小屋・室堂を室所と変えたものの明治末期には室堂に戻っているよう

に、多くの名称が元の仏教系の名に復元された。その一環として芦峠という地名も、芦峠寺に復活したという変遷がある。

当論述での「芦峠寺」と「芦峠」の使い分けは、正式名称・地名を表す場合のみ芦峠寺とし、それ以外は、現在、地元の人びとが日常的に使っており馴染みのある芦峠とする。

- (2)「立山ガイド」と「芦峠ガイド」の使い分けは、立山ガイドとは、旧立山案内人組合および現在の立山ガイド協会に所属している（いた）人びとと、所属以外に山岳文献に記されている実質的な芦峠在住山案内人を示し、芦峠集落以外の案内人を含む。芦峠ガイドとは、立山ガイドのうち古くから芦峠集落に在住している（いた）人およびその親族関係の山案内人・山岳ガイドをいう。
- (3)「ガイド」という職業を表す用語は、日本では大正期中頃より一部には使われていた。当論述では立山方面の慣習に習い、概ね、明治末期から太平洋戦争終結までを「山案内人」「案内人」、戦後を「山岳ガイド」「ガイド」として使い分ける。ただし、上記(2)の「芦峠ガイド」「立山ガイド」は、この区分にとらわれず、一つの熟語的扱いとし、太平洋戦争終結以前であっても使用する。

なお、山案内人と案内人、山岳ガイドとガイドは同じ意味であり、文の前後のフレーズによって適宜使い分ける。

- (4) 今日では控えるべき文言ではあるが、文章の時代性に鑑みて「人夫」という用語を用いる。この論述でいう人夫とは、山案内人の見習いをいい、仕事の内容は主として荷担ぎである。
- (5) 名前のみ表示は「佐伯」姓であり、登場する人物の敬称は省略する。

## 2. 芦峠ガイドの正しい記録のために

芦峠集落の山案内人は、登山の脇役として日本の登山史に燦然と輝いている。

この輝かしい多くの登山記録のなかで、芦峠ガイドとその案内人を支えた人びとの姓名や親族関係が、誤って記されていることが多々あり、芦峠関係者以外の人びとには誤った認識のまま日本登山史を理解している現実がある。

芦峠ガイドには、いつの時代でも圧倒的に佐伯姓が多い。佐伯姓の由来については諸説がある。『富山県姓氏家系大辞典』（1992年刊）には、「佐伯姓は越中の古姓で、各地に分布しており、佐伯有頼の子孫と称する氏が多いが、中でも立山山麓の芦峠寺に特に多い」とある。『立山町史』上巻（1977年刊）には、富山県

の歴史学者・木倉豊信の見解として「伝承や縁起から想うに、古来、新川郡布施保（注：中世の地名、現在の片貝川の支流である布施川の両域で、黒部市と魚津市の一部）に蕃延した佐伯一族が、天台宗寺門派に帰依し、国司として来任した有若という指導者によって、集団的に立山山麓に移動して芦峠寺を起し、後に有若を開山と仰いだ」と紹介している。また、1870（明治3年）の「平民苗字許可令」、1875（明治8）年の「平民苗字必称義務令」によって、芦峠の住民も苗字を持つことになり、芦峠ゆかりの立山開山の祖である佐伯有頼から苗字をもらったのではなからうか、とする地元で調査している人の見解もある。

佐伯姓に次ぐ人数の多い志鷹姓の祖先は、芦峠地区の先住の人たちであった。現在の芦峠集落から東方2kmの志鷹谷に居住していたが、大洪水による山崩れによって、その西方1kmのところに移住した。現在はこの第2の旧地を古屋敷と呼んでいる。志鷹氏は独立した集落を形成していた一族ではあるが、寛永年間（1624～1644）に佐伯氏と合併し、現在地に居住した。

近代登山の記録にみる芦峠ガイドについて検討を加える。

日本は鎖国を解いた1858（安政5）年から明治初期にかけて、外国のいろんな分野の科学者・技術者たちを日本へ積極的に招聘した。近代文化の形成や促進を図るために招いたこのお雇い外国人と、欧米から来日した外交官や宣教師が、来日まもなく日本の山々を趣味・遊びとして登った。1860（万延元）年7月26日、初代イギリス公使ラザフォード・オールコックらの富士山外国人初登頂が、日本における近代登山のはじまりであろう。ちなみにヨーロッパ・アルプスでは、イギリスのアルフレッド・ウイルスが、1854（安政元）年9月17日、グリンデルワルトからヴェッターホルンへの登頂が、近代登山の創始の日とされている。

明治初期の外国人登山には、従者や山人が伴う登山ではあったが、案内とか山案内人という形のものではなかった。ただし日本人による近代趣味登山が生まれていない時代ではあったが、宗教登山として登っていた日本三霊山をみると、富士山では麓の宿泊所が御師、山案内は強力。白山は美濃禪定道の石徹白では御師が宿泊と山案内を行い、越前と加賀禪定道の山案内は強力が担った。立山では坊家が宿泊、中語が山案内人であるように、登拝登山では山案内というシステムが歴

然と機能していた。

日本人による山登りの経緯をみると、奈良末期からの宗教による登拝登山がはじまりで、江戸時代のみではあるが230年も続いた黒部奥山廻りのような管理登山、明治時代に入って鉱物・植物探索などの学術登山や地理の研究や地勢図・地形図作成の測量登山、および山人の狩猟・イワナ釣り・山菜採りなど生活の糧としての山登りが平行して行われていた。そこへ山人には全く理解できなかった、山へ登ることそれ自体を目的とした趣味の登山・遊びの登山が入り込んでくる。この登山を近代登山といい、後にその一部をとらえてスポーツ登山ともいうが、それは1894（明治27）年、志賀重昂著『日本風景論』の出版によって華々しく開花した。その頃は宗教登山として開かれた山以外は、山道や山小屋がなく、もちろん地図や案内書もない。そのうえ山名や地名が不確かで確定していない。したがって山人を欠いては、とても山登りという目的は達せられなかった。

明治の中頃から大正中期までの日本の近代登山黎明期、つまり探検登山時代においては、この趣味・遊びの登山は山案内人を伴うのが一般的で、案内人の力量が目的を達成する重要な要素となる。案内人は登山の裏方ではあるが、未踏の山峡では先導という役割を果たしながら新ルートを開拓する礎となった。

ところが山案内という仕事は、需要・供給のバランスや仕事の危険性、責任や労力の多寡によって全国的に日当が徐々に高額になるとともに、山中では登山者の期待や要望と、案内人の行動に隔たりが生じてきて、両者の間では金銭や山中での対応をめぐるトラブルが度々発生するようになる。

立山方面では1909（明治42）年、室堂に富山日報社（現：北日本新聞社）が立山接待所を設けて、記者の大井冷光（本名：信勝）を駐在させ、「天の一方より」と題して立山の登山状況をつぶさに富山日報に連載した。それには宿泊所の設備や中語の態度を批判した記事がみられる。

その後、大正期に入ってから、中語が雄山へ登拝登山の案内を行っていた形態から、北アルプスを中心とした近代登山の案内人へと転換した時期であり、山の名をよく知らないなど、芦嶽ガイドの品格を落とすことがあったことは否めない。

その改善と案内人の資質向上を図るために、1895（明治28）年から1897（明治30）年7月の間に結成され

た立山中語人夫同盟を、1921（大正10）年7月に立山案内人組合に改組し、宗教登山から近代登山の案内人へと変革するための取り組みが行われた。当時の組合員は70～80人であったが、ほとんどが佐伯と志鷹姓が占めており、登山記には山案内人の同姓が並ぶ。

大正の中頃から昭和初期には、日本の登山は雪と岩の時代を迎える。この頃には芦嶽の山案内人や山小屋経営・管理者が150人近くであったが、その中でも「佐伯」姓が圧倒的に多く、それに「志鷹」姓が次ぐ。その他には芦嶽へ古くから移住した「講神」と「三川」の2親族で、芦嶽からの嫁ぎ先、つまり芦嶽の人たちがいう外孫では「杉田」のみで、のちに夏期の立山案内人組合詰所で、戦後、薬師岳方面の山小屋を経営した「五十嶋」と、1957（昭和32）年、みくりが池温泉を新設した「尾近」や、その後祖母谷温泉を経営した佐伯芳弘の娘・いく子の主人である「峰村」が加わる程度である。

したがって、登山記や紀行文で、単に「案内・佐伯」や「ガイド志鷹」と記されていても、その人物を特定できない。

立山連峰に関連する映画や、映像記録に映し出されるエンドロールには、監督やスタッフなどとともに、協力者には「佐伯」姓が列挙される。鑑賞者は芦嶽の案内人であることは認識するものの、名前まで詳しく知ることを観念するくらい同姓が多く映し出される。

日本山岳会編『山日記』は、全国の登山案内組合と案内人を体系的に継続して収載していた。1930（昭和5）年から1954（昭和29）年版まで「案内人」欄を設け、案内人の氏名・年齢などを紹介している。太平洋戦争のため出版できなかった年や案内人の氏名が記されていない版もあるが、他に類例をみない登山案内人の貴重な史料であって、山案内人に関しての調査には欠くことができない。

それによると、全国の登山案内組合の中で、立山案内人組合は、組合員人数と冬期案内の能力ある案内人が最も多い。組合員のうちには、芦嶽の案内人が圧倒的に多く、そのほとんどの人は冬期案内の能力を有する人である。しかし、芦嶽以外の案内人では、夏山のみ案内人が多い。収載されている一覧には、佐伯と志鷹姓が並んでおり、それに三川と講神・杉田以外は、芦嶽以外の案内人であると解釈してもよい。

その収載一覧表は、立山案内人組合から日本山岳会へ提出した資料に基づいたものではあるが、収載され

ている個人の氏名・年齢を経年的に追ってみると、版によっては名前や年齢に誤りがみられる。

総じて登山文献や地元の歴史書に記されている芦峠ガイドの氏名と、その親族関係を示す記述には、おびただしい誤りが散見される。地元の自治体や新聞社の発行する文献・記事にも誤りがみられ、そのうえ芦峠ガイドが著した著書や芦峠ガイドの口述を文章に著した書籍であっても間違いがある。

最近（2009・平成21年）発行された山岳紙誌に、芦峠ガイドの親族に触れている一文がある。その記述には一世代が抜けていて、孫が当該ガイドの長男としている『会報』があった。

このような混乱の原因の一つに、中語からの習性である芦峠ガイドの愛想の良さがあげられる。お客を思いやる誤った習性といってもいい。近代登山黎明・隆盛期の登山者には、地位のある人や学校山岳部の人たちが多く、登山後に紀行文や登山報告書を書いて実績を残すことが習わしであった。案内・人夫の名前を記録するにあたって、芦峠ガイドに「この名前がいいですか」と確認すると、「そいがですちゃ」と多少の間違いがあっても、登山者に心くばりを施したつもりで正さないことがあった。その後の登山者の紀行文などで、誤った名前の記録をそのまま引用し、さらに孫引きする。このことが山岳文献に芦峠ガイドの姓名や親族関係に、混乱や誤謬が生じた原因の一つであろう。

この習性は明治期の芦峠の宿坊に《山中宝あり、求めざる者これを得る》と書かれた色紙があったように、中語や後の芦峠ガイドは、人との出会を山中の宝としていた伝統によって、お客を尊ぶことがもたらした結果であろう。つまり、登山者である“お客さま”を大切にしている習性は、長い歴史のなかで集落の人びとの血肉に深くしみ込んでいたことによる。しかし、伝統は守るものではあるが、悪しき因習はかえるものであり諫めるもので、名前などはきちんと正さなければならなかった。

近代登山という行為は、運動面と文化面を兼ね添えており、運動面を表す登山記録には脚色のない正確さが絶対条件である。登山は他のスポーツとは異なって、人と人との雌雄を決する競技ではない。登山記録は登山者自身が綴ったものではあるが、他のスポーツという戦歴である。したがって登山者自身が記録する内容には、絶対に誤りや脚色があってはならない。山案内人は脇役ではあるが、探検登山時代や雪と岩の初期の

時代には、案内人が初登頂・初登攀を先導しており、その案内人の記録に齟齬があってはならない。競技スポーツで出場した選手の名前に誤りのある記録は、認められないことと同じである。

これら日本登山史や山岳文献の誤謬・不明点を補う視点からも、整然とした芦峠ガイドの系譜を必要としていた。

登山史の間違った記録は、そのまま未来に残留してしまうことを危惧する。この状況に鑑み、不十分ではあるが「芦峠ガイドの系譜」を長年にわたって調査したので、その結果をここに発表する。

### 3. 山案内人および猟師の系統

「芦峠ガイドの系譜」の認識を深めるために、系譜に係わる一側面を考察する。

芦峠には「山案内人の系統」と「狩猟の組」が存在していた。それに芦峠ガイドが集う「剱沢小屋グループ」と山案内の副業として猟を行う案内人と、猟師の憩の基地である「平ノ小屋集団」があった。

芦峠ガイドは、一旦、山へ入ると皆兄弟であるという意識が強い。その中で、一定の秩序に従って統一性のあるつながりができる。つまり、山案内や狩猟を目的として、山を一緒に歩き、同様な経験をするなかで師弟関係や協力関係が生まれ、それが系統や組を形成した。

芦峠には集落の人の遭難には、村中が総動員態勢で捜索するしきたりがあった。芦峠のすべての人が、子供の時から山とともに生きてきた人たちで、案内人のみではなく、特に職業を問わず、サラリーマンであっても山へ行ける人たちが総出で救助や捜索に向かう。太平洋戦争末期の遭難時には、元気な男子は徴兵されていて芦峠には少ない。それでも老人と婦女子が救助に向かっていることもあった。このことは集落全体としての結束が非常に固いことを意味するとともに、山に対する集落の姿勢が整然とした系統を成立させる要因にもなっていた。

#### (1) 案内人の系統 甚三と新屋

趣味とか遊びによる日本人の登山は、旅行の延長からはじまったが、明治の中頃から本格的な近代登山となる。立山方面では1878（明治11）年6月、越中の漢学者・小杉復堂が和田芳高、佐伯雪村とともに多枝原温泉（立山温泉の旧名）から浄土山、雄山へ登り、芦

峠へ下山したことが近代登山のはじまりであろう。

この登山は趣味の登山ではあるが、登拝登山道を趣味の登山として登ったものに過ぎない。本格的な近代登山は、かなり下って1906（明治39）年8月、日本山岳会（当時は山岳会）の大平晟、高頭式（のちに仁兵衛）、志村鳥嶺（本名・寛）、高頭の従者・渡辺権一が、大町から針ノ木峠を越えて黒部川を渡り、雄山から別山へ縦走した登山がはじまりであろう。大町で3人の人夫を雇ったが、雄山は中語の案内でなければ登れないので、立山温泉で大町からの人夫を解雇し、水口辰次郎（注：上滝の人と思われる）という中語ら3人を雇う。雄山などへ登山後、大平のみ称名滝を探索しているが、案内は佐伯直次郎であった。

明治末期から昭和初期の芦峠ガイドには、佐伯平蔵（1代目）（1878・明治11年生れ）、春蔵（1883・明治16年生れ）兄弟、国蔵（1878・明治11年生れ）、軍蔵（1882・明治15年生れ）、八郎（1885・明治18年生れ）という平蔵の従兄弟を中心とした甚三（屋号）の系統と、佐伯栄作（1890・明治23年生れ）、宗作（1897・明治30年生れ）、兵治（1905・明治38年生れ）兄弟や、栄作の妹が妻である亀蔵（1888・明治21年生れ）を中心とした新屋（屋号）の系統があり、それぞれ時代を背景とした大きな特徴があった。

甚三の系統は、主として大正期中ごろまでの探検登山時代を担い、芦峠ガイドの草分けの系統である。系統の統率者・平蔵は、1913（大正2）年に日本山岳会の近藤茂吉を長次郎谷から劔岳へ案内し、別山尾根を初下降した。このときに、尾根から劔沢へ落ち込む谷を、宇治長次郎がはじめて下降した谷ではあるが、近藤はあえて「平蔵谷」と命名し劔岳に名を残すこととなった。これは劔岳から別山までの尾根（現在の別山尾根）の初下降を先導した功績を讃えるためと、長次郎はすでに「長次郎谷」と称して劔岳に名を留めていること、および平蔵と長次郎は無二の親友であることを近藤はよく心得ていたことによる。陸地測量部、1932（昭和7）年6月発行の5万分の1地形図から「平蔵谷」と記された。

平蔵は1921（大正10）年7月、立山中語人夫同盟を近代登山の案内に即応した立山案内人組合に改組し、初代組合長となって近代登山案内への道を開くとともに、案内人の資質の向上を図った。八郎は平蔵に次いで立山案内人組合の2代目組合長で、称名滝の滝

口近くから弥陀ヶ原へ登る急坂の「称名坂」を、八郎の案内功績を慕い、越中の岳人が中心となって「八郎坂」と命名した。国土地理院の地形図の「称名坂」が、1977（昭和52）年9月発行の2.5万図から「称名坂（八郎坂）」と記され、1997（平成9）年10月発行の2.5万図から「八郎坂」と記されている。

したがって芦峠ガイドの近代登山案内の原型を築き上げたのは、平蔵と八郎といっても過言ではなかろう。

平蔵は1921（大正10）年の暮れに、芦峠ガイドが積雪期の案内ができるよう芦峠にスキーを導入した。馴染みの第四高等学校旅行部（現：金沢大学山岳部）の部員と、当時のスキーのメッカ新潟県の高田へ乗り込み、スキー術の指導を受けて、スキー1台と長さ2mほどの1本ストックを持ち帰り、自宅の庭を屋根から降ろした雪を斜面にして軒下スキーを行った。これが芦峠での本格的なスキーのはじまりで、平蔵の庭には多くの芦峠ガイドが集まった。平蔵は1～2年後に再び新潟の高田や赤倉へ行き、スキーの研鑽を重ねた帰途に東京の田部重治宅などに立ち寄ってはいるが、そのときにも1台のスキーを持ち帰っている。そのスキーが、現在、千寿ヶ原の文部科学省登山研修所に展示されている。

その後芦峠ガイドのスキー術は、軒下スキーから畑スキーへと進み、山スキーへと発展する。

1921（大正10）といえば、越中山岳会（代表・牧野平五郎）が発足した年であり、富山薬学専門学校（現：富山大学薬学部）に山岳スキー部が設立されている。この頃から日本の登山界は学校登山が隆盛を極め、雪と岩の時代の黄金期を迎える。

芦峠ガイドが案内中にスキーを使用したのは、一部ではあるが1923（大正12）年3月、伊藤孝一一行の針ノ木峠越えが最初で、平蔵と八郎は立山温泉周辺でスキーを使っている。このときは横有恒一行のスキーに習って、2本のストックとなった。針ノ木峠越えの2カ月前に発生した松尾峠の遭難事故は、近代登山の先駆者で当時最も精鋭な横有恒、三田幸夫、板倉勝宣がスキーを使用しており、芦峠ガイドと映画撮影技師2人は輪カンジキであった。遭難の原因の一つに登山者と案内人の歩速が異なるために、別パーティーとなって行動したことが上げられている。芦峠ガイドはこの遭難を教訓として、スキーの実用化を早めるよう相当な努力を惜しまなかった。

1930（昭和5）年、別山乗越に芦峠集落共有の山小

屋「劔御前小屋」(現・劔御前小舎)を建てた。後に別山乗越小屋とも言われたが、この建設資金は借金であった。2年たっても不足の資金が調達できず、日本山岳会の会員に協力を求めることとなる。その募金には、多くの会員と知己の間柄である平蔵が選ばれた。平蔵は大仙坊の幸長とともに、四高を皮切りに京都、大阪、神戸、名古屋の主だった日本山岳会の会員を訪れ、資金調達に大きな役割を果たしている。

一面、平蔵や八郎は若いガイドを育成することにも熱心で、親切な指導を行っていた。志鷹光次郎(1897・明治30年生れ)は、ガイドとして第一歩を踏み出したのは1924(大正13)年、18歳のときに平蔵の指導をうけ、2人で劔岳～雄山～薬師岳を縦走したことがはじまりである。光次郎は一度も遭難を起こさず、山のガイド一筋で一生を終えている。

志鷹喜一(1897・明治30年生れ)は平蔵の弟子といわれていた。喜一の妹・ヒデは宗作の妻であり、親族的には新屋の系統に入るべき案内人ではあるが、山案内の系統は親族関係よりも師弟関係が強かったようだ。喜一は劔沢小屋が雪崩によって倒壊し、それによって圧死した遭難捜索の一件で、ガイドを辞めたのが惜しまれる。

伊太郎(1903・明治36年生れ)は、平蔵、八郎らに連れられて1920(大正9)年、17歳から案内人として1本立ちしている。後の平ノ小屋管理者・佐伯覚英(1908・明治41年生れ)は、1926(大正15)年、18歳から平蔵や八郎について山へ入り案内人となった。善二(1891・明治24年生れ)、民吉(1908・明治41年生れ)、利雄(1912・大正1年生れ)、勝蔵(1913・大正2年生れ)、杉田寛治(1913・大正2年生れ)らは甚三の系統である。

1935(昭和10)年前後には、2代目平蔵(1911・明治44年生れ)や利雄らは登山靴を専門に造っている東京四谷の「たかはし」で、オーダーメイドの山靴を造るようになった。つまり、この頃から芦峠ガイドは、一流の装備を整えるよう心がけるようになったことの証である。

1920(大正9)年から雪と岩の時代に入ると、新屋の系統が芽生える。日本山岳会機関誌『山岳』第13年第1号(1918・大正7年12月刊)に収載された「越中立山村芦峠寺の登山案内者(立山登山口)」には新屋の系統の案内人は載っていない。新屋の系統は、雪と岩の時代に芦峠ガイドの黄金時代を築き、新ルート

を開拓した系統である。この系統には得意性があり、栄作のような設営を得意とする案内人と、亀蔵や宗作のような初登を先導するパイオニア精神の旺盛な案内人などから構成され、多様な才能を持っていた人の集団である。

宗作は1923(大正12)年8月、学習院の岡部長量を八ツ峰の完全初踏破に導き、亀蔵は1926(大正15)年1月、慶應義塾山岳部一行の厳冬期劔岳初登頂を先導した。これらの登攀が代表的な登山案内記録であろう。

大正の中頃、尖鋭的な登山者の間では、八ツ峰全峰の初踏破を計画していた人が多い。それをいち早く岡部と宗作で成し遂げ、一躍、両人とも一流のクライマーとして賞讃された。一方、大正末期、厳冬期未踏の劔岳は、特に学校山岳部では初登頂を狙う対象とされていた。志鷹光次郎の先導による積雪期の劔岳初登頂の実績があり、1925(大正14)年、厳冬期の劔岳に挑んだが、連日吹雪のため断念した慶應義塾山岳部が、当然のように1926(大正15)年も初登頂の計画を立て、芦峠ガイドは亀蔵、栄作、志鷹光次郎を選んだ。先導する亀蔵についてリーダーの青木勝は「山案内としては最も精悍で、しかも剛胆な亀蔵を選んだ。それは熱のある点からいっても力量の上から云っても先ず芦峠寺村の猟師の中では彼に勝るものはいなかったからである」と評し、「亀蔵を私らの一員として全然同じ状態におく為に登山具は全く私らのものと同一のものを彼に与えた。

彼にはピッケル、シュタイクアイゼン、リュックサック、スキー等から毛靴下等に至るまで全く私らと同じ条件にした」と報告書に記している。亀蔵は劔岳へ出発する朝、室堂で待機する栄作に「今日という今日は、みんなが引き返そうと云い出さない限り、どんなことがあっても自分は頂上まで登る決心だ」と話し、万一に備えて風呂敷包みを義兄弟である栄作に渡し、「形見分け」の依頼をしたという。芦峠ガイドが死を賭して挑んだ登山であった。

宗作は1935(昭和10)年、それまでの日本人では、個々には外国の登山や探検が行われていたが、国外に団体としてはじめて遠征した京都帝国大学白頭山遠征隊に、日本を代表する富山・長野・岐阜の山案内人3人のうち、富山を代表する一人として選ばれた。宗作は主として前進隊・突撃隊として活躍し、冬期初登頂の原動力となった。隊長の今西錦司は自著『山と探検』に「も

し私の知っているグループでヒマラヤへ人夫もつれて押し出そうという時は、第一に宗作が名指しされるだろうと私は信じていた。宗作も口には出さなかったが、それくらいの自信と覚悟は持っていただろう」と記している。

芦峠ガイドのうち、最初に外国の山を経験したこの新屋の系統には、後の1956～57（昭和31～32）年に日本の国家的事業であった第1次南極観測隊の設営隊員として、宗作の長男・宗弘（1925・大正14年生れ）、文蔵の弟、安次（1925・大正14年生れ）、栄作の長男で姉は文蔵の妻である栄治（1927・昭和2年生れ）に、越冬隊員で芦峠ガイドの南極行きを推進し、妻は文蔵の長女である富男（1929・昭和4年生れ）が選ばれている。芦峠ガイドから5人選ばれたが、あとの1人は富男の無二の親友である昭治（1927・昭和2年生れ）が、第1次とともに第2次では富男の迎え役として参加している。この人たちは、すべて新屋の系統のガイドたちであった。

新屋の系統は、栄作を筆頭にクマ獲りや、宗作をはじめとしたイワナ釣りの名人が多い。狩猟については「(3) 狩猟の組頭 嘉左衛門と利三」で述べる。

新屋の系統には悲劇的な側面がある。新屋の仁次郎の子供は4男1女であるが、長男・幸定は1916（大正5）年、29歳の時に、芦峠の同年配である長松が常願寺川に流され、その長松を助けて自分は川にのまれて死亡。新屋の長女・ソメは亀蔵に嫁いだが、亀蔵は1926（大正15）年2月、真川で雪崩に遭って死亡しており、四男・兵治は1930（昭和5）年1月、劔沢小屋が雪崩によって倒壊し、登山者4人と同僚の案内人・福松とともに圧死した。三男の宗作は1935（昭和10）年5月、同僚の案内人・豊太郎が地獄谷で有毒ガスの穴に落ち、豊太郎を助けて自分が犠牲になった。同僚を救って己が犠牲になった2例は、一般的には危険であり控えるべき行動であったと思われるが、芦峠ガイド魂がそれを許さず自然に身体が反応したのであろう。このように栄作以外は、不運な事故に遭遇している。

宗作は息子の宗弘と同じように、講神音次郎（1923・大正12年生れ）を育て、山を教えた。吉二（1914・大正2年生れ）は、宗作の愛弟子であった。1951（昭和26）年3月、吉二を含む芦峠ガイド3人がヌクイ谷で雪崩に遭い、吉二は重傷ではあったが生還し、あとの2人は死亡してしまった。豊治（1910・明治43年生れ）は、1924（大正13）年5月、15歳になったばかりであっ

たが、秩父宮立山スキー行に荷担ぎとして同行した。ところが吹雪のなかを大人並に50kgの重荷を背負われ、あえぎながら足を進めている姿を亀蔵がみていて、豊治を怒鳴りながらガイド根性を叩き込んだ。しかし、しごかれた豊治は亀蔵の娘と結婚している。豊治は17歳でガイドの免許を取得し、四高の専属ガイドとして16年間つとめている。亀一（1918・大正7年生れ）なども栄作、宗作、亀蔵について山歩きを仕込まれた。このように、当時としては比較的若い芦峠ガイドの多くがこの系統であった。

## (2) 劔岳の基地 劔沢小屋グループ

芦峠ガイドが一つのまとまりとして特徴のあるのは、劔沢小屋グループである。劔沢小屋を拠点として、劔岳への案内を行っていた戦前の佐伯源次郎（本名：源之助、1875・明治8年生れ）たちと、劔岳の岩場登攀の案内と遭難捜索・救助にあたった戦後の佐伯文蔵（1914・大正3年生れ）グループである。

昭和に入ってから、山案内人として山岳文献などに掲載されている佐伯源次郎（屋号を継ぐ、1907・明治40年生れ）は、源之助の長男であり、当論述での源次郎とは、屋号である通称・源次郎と呼ばれていた源之助を指し、源之助の長男である源次郎にはその都度説明を加える。

源次郎は劔岳「源次郎尾根」に名を留めた。営林署の仕事で立山・黒部の山峡をかなり踏破しているが、中語と近代登山の案内が混在している時代で、源次郎も中語であった。近代登山が開花した時代には50歳近くであり、劔岳以外の案内は不明である。

源次郎は山案内よりもむしろ、大阪毎日新聞社による劔沢小屋新設の責任者として、1922（大正11）年から劔沢へ入り、2年後の7月に建設を終えた実績が上げられる。当時、劔沢という場所で本格的な山小屋の建設は、相当な苦勞を伴うものであった。劔沢小屋の建設後は、小屋の経営・管理に力点を置き、戦後の1948（昭和23）年に至るまで、小屋を守るとともに登山者には多大な便宜を与えた功績が大きい。劔沢小屋運営と平行して、一時、劔御前小屋や室堂も管理していた。その頃の劔沢小屋は長女の嫁ぎ先である善蔵（屋号）の佐伯芳房（1894・明治27年生れ）が、源次郎の右腕として運営していた。源次郎（本名・源之助）の長男の源次郎や二男の政光（1916・大正5年生れ）

をはじめ、子や孫を中心に男女を問わず多くの芦峠の人が3小屋の管理運営を手伝った。このつながりを源次郎グループと呼ぼう。

源次郎たちは劔沢小屋にいて、特別に指名があった登山者を劔岳へ案内していたが、その登山者の入下山には芦峠の源次郎の家へ立ち寄る。囲炉裏には、いつも登山者5～7人がお茶を飲み、煮物などを食べながら雑談している光景があった。この人たちは劔岳という名峰に取り組んでいる源次郎の常連の登山客であった。

源次郎の天気予報は的中することが多く、劔岳へ登る登山者には「雨が降ったら、その場でじっとしておられ。すぐ迎えに行くちゃ」と教え、源次郎の指示で二男の政光や文蔵が、雨に濡れた登山者をよく迎えに出かけ遭難防止に貢献していた。源次郎は劔沢小屋から芦峠へ帰るときには、雄山の峰本社を詣でることが多かったという。

「源次郎尾根」を巡っては諸説ある。ここでは結論のみを述べるに留める。尾根の表記は源次郎尾根が正しく、源治郎尾根は誤りである。尾根に名を残した人は佐伯源次郎（本名・源之助）であり、片貝川沿い平沢村（現：魚津市平沢）の沢崎源次郎ではない。佐伯源次郎が劔岳へ登ったのは、1924（大正13）年の夏、劔沢小屋造りの合間をみて、小屋建設の仲間と劔へ登ろうといった気軽な気持ちで平蔵谷をつめたが、平蔵谷の途中から間違えて右の雪溪、現在の名称でいうS状雪溪に取り付き、雪溪の途中から左に折れてⅡ峰のコル近くの稜線に出て頂上へ達した。単独で登ったのではない。登った動機は、劔沢小屋建設記念として劔岳の頂上に祠を設けるためではなく、しんぱくという木（深山柏槇ともいう）が、劔岳の尾根に生えているようなので木こりを連れて取りに行ったのでもない。

源次郎尾根の命名者は、明治大学山岳部OBの馬場忠三郎で、第三高等学校（現：京大）の高橋健治が『三高山岳部報告』第5号（1927年刊）に、劔岳各所の登攀記のタイトルとして大きな文字で「八峰、源次郎尾根」と載せて以来、尾根の名が定着した。公の地形図に記されたのは、地理調査所（現：国土地理院）の1959（昭和34）年5月30日発行の5万分の1地形図からである。源次郎は大工でも棟梁でもない。当時の芦峠の大工は利三（屋号）の系統である。源次郎が登った登路を、1915（大正4）年7月22日に冠松次郎が平蔵らの案内で下降しているという報告がある。冠の登山報告を仔

細に検討すると、本峰南壁を下降しており、源次郎が登った登路とは全く異なっている。源次郎が登ったルートは未踏であった。

なお、「つるぎだけ」の表記は「劔岳」である。劔岳とか劔岳、劔岳などではない。国土地理院は2004（平成16）年1月1日から表記を「劔岳」とし、地形図も同日発行の2.5万分の1図から「劔岳」を「劔岳」に修正した。劔岳のほか、「前劔」「劔沢」「劔御前」の表記も改訂している。

戦後は佐伯文蔵をリーダーとする劔沢小屋グループが芦峠ガイドの中心となって活動する。文蔵は1931（昭和6）年に17歳でガイド試験に合格して山案内をはじめるとともに、志鷹光次郎にかわいがられて狩猟を教わった。1949（昭和24）年から劔沢小屋を経営・管理する傍ら、1950（昭和25）年4月、日本医大山岳部の長年の目標であった積雪期劔岳東大谷中尾根を先導し、初登頂を成し遂げた。日本では山岳ガイドが先導して初登頂・初登攀の記録を樹立した登山は、この中尾根が悼尾を飾るものである。日本医大では文蔵尾根と命名したが、その名称は長く続いて使われず、現在は中尾根と呼ばれている。

文蔵にとって日本医大山岳部は、古くからの専属ガイドで、1943（昭和18）年ごろその部員たちと私的な山行として南アルプスへ行き、北沢峠の長衛小屋経営者・南アルプスの主と云われる竹沢長衛に会っている。芦峠の人には誰にも話さずに出かけているが、芦峠ガイドが山へ入るといふことは、金を稼ぎに行くことであって、山で金を使うといふことは考えられなかった時代である。しかし、山で生きようとする文蔵にとっては、山に関することは何でも吸収するといふ進取の気性があり、山への熱意が行動に表われたのであろう。

戦後の劔沢小屋には、芦峠の若手ガイドが多く集まった。栄治（1927・昭和2年生れ）は、文蔵とともに1947（昭和22）年から劔沢小屋へ入っているので文蔵グループの中心であり、小屋運営の片腕であった亀一（1918・大正7年生れ）や、後に劔岳早月尾根に伝蔵小屋（現：早月小屋）を新設した伝蔵（1926・大正15年生れ）、北大山岳部出身の富男（1929・昭和4年生れ）らも一員である。

文蔵グループの栄治は、登山者の要望によって八ツ峰や源次郎尾根の岩場を中心に、劔岳全域にわたって案内していた。芦峠ガイドが劔沢小屋まで案内し、劔



岳の岩場は栄治が担うこともあった。したがって栄治の八ツ峰を中心とした剣岳の岩場行きは、案内と遭難の捜索・救助を含めると数えきれない。剣岳の遭難防止、捜索、救助、遺体収容、茶毘は文蔵グループが担っていたが、現在は富山県警察山岳警備隊がその任務を果たしている。

現在の剣沢小屋は、文蔵の長男・友邦（1942・昭和17年生れ）が継ぎ、剣岳の案内とともに多くの遭難救助に貢献し、友邦の長男で3代目の新平（1973・昭和48年生れ）と共に剣岳を守っている。

### （3）狩猟の組頭 嘉左衛門と利三

狩猟は命を賭し集団で行う生業であり、自然に気心が通じ合う者同士がグループを編成する。無理に他人をグループへ誘わない。この狩猟グループを芦峠では組と称し、技量に最も優れた人が組頭を務めた。組では組頭や古参の猟師から、代々にわたって気象の判断や雪崩の予知、山峡の地形、狩猟動物の生態などの知識を吸収する。そして自身の狩猟経験から体得したものを加味して次代へと伝承していた。

以下、ニホンカモシカ（芦峠ではシシと呼んでいた。以降カモシカと略す）の狩猟の一部を記述するが、現在は禁猟であり、文中のカモシカ狩りは主として1934（昭和9）年以前を表している。1873（明治6）年、鳥獣猟規則が制定されたが、カモシカは旧来と変わらず狩猟獣であった。1895（明治28）年に狩猟法が制定され、同法は1918（大正7）年の全面改正（施行は1919年）を経て、1925（大正14）年の再改正によって、狩猟から除外されて保護の対象となる。

その後、1934（昭和9）年5月1日、史跡名勝天然記念物保存法によって天然記念物に指定され禁猟となった。しかし太平洋戦争による戦中・戦後の社会混乱による密猟によって、生息頭数が著しく減少した。1955（昭和30）年、文化財保護法（旧・史跡名称天然記念物保存法）によって特別天然記念物に指定され、手厚く保護された。現状はかなり増殖したために農林被害が各地で問題になっている。

戦前の芦峠には、狩猟の組として嘉左衛門（通称・加蔵、1891・明治24年生れ）と利三（屋号・リザ、組頭の常次郎は明治初期の生れ）を組頭とする2つの系統があった。

嘉左衛門は1923（大正12）年1月、当時日本山岳界

の精鋭であった横有恒、三田幸夫、板倉勝宣の遭難に、救援の一人として参加した。そのときの逸話が、芦峠ガイドの気骨を表している。凍死で板倉を失った横と三田は、奇跡的に立山温泉にたどりつき生還した。横は救援にきた嘉左衛門との模様を「板倉勝宣の死」にこう記している。日本山岳界の大御所への激励であり、嘉左衛門を端的に表しているので少々長い引用となる。

「闇の家に活気が横溢して来る。暮れて一同が集つて物語りをする。見ると眼光の恐しく鋭い男が入つて来た。見詰める力は射通すやうに坐つてゐる。彼は徐ろに重い口を開いた。

横さん、おれは七度此の足の爪が生え替つた。凍傷は決して失望して切つてはいかん。これだ此の爪もだ。それからだ、おれは二度に三人の仲間を雪崩でやられてゐる。又も失くして歸るときの心持が分るだらう、いゝか君はいろはのいの字丈を知つたのだ。おれには未だろとはとがある。ほんの學問をしかけたばかりなのだ。それで山が嫌になる位ならお前は男ぢやない。おれは十三の時から山に入つてゐるのだ。いゝか君はいの字だけを知つたんだぞ。

云ひ終つて彼は高く笑つた。満座は黙然として聞いてゐる。超人間的な男だ、強靱な精神の所有者だ。彼は甘くない。眼光が物語つてゐる。運命と永年戦つた強い響だ。そして金なんか何でもないと蹴飛ばしてゐる。赤裸々の力だ。彼は加蔵と云ふ。黒部の溪谷の埋れ木だ」。嘉左衛門を通称の加蔵と著しているが、嘉左衛門は猟師としても山案内人としても強烈な個性の持主で、近代登山の山案内人としては芦峠ガイドの黄金期である大正期に活動しており、立山の故事来歴にくわしい一人であった。一面、村の子供たちには非常にやさしい人であったようだ。

若い時から中語をつとめ、猟師としての腕が抜きんでていて、一冬に30頭のカモシカを射止めたといわれる。山へ入っても食料をもたず、カモシカの肉を主食としていた。この組は剣岳の西面へも度々出かけているようであるが、雪崩遭難に2回遭遇し3名が死亡している。ただし詳細は不明である。この組は猟に長けている人たちの集団で、猟の回数もかなり多いようであったが、その詳細は不明である。

利三は芦峠の大工の系統でもあった。組頭の常次郎の業績は定かではないが、名ガイドでクマ撃ちの名人、のちに内蔵助山荘を建設した利雄（1912・大正元年生れ）

は、利三組若手の中心となる。利三組には利雄と従兄弟の兼盛（1907・明治40年生れ）や同い年生れの亀吉がいた。兼盛は10歳代から狩猟をはじめて50年近くを数え、射止めたクマは107頭になるという。利雄も40年余りのキャリアを持ち、自分で射止めたクマの数は80頭を越え、利三組全体では数えきれない。利三組は獲ったクマの数も多いが、長い狩猟生活で一人の犠牲者も出していない。この組を継いだ人は、利雄の義弟・志鷹三義（1924・大正13年生れ）や兼盛の息子・盛一（1931・昭和6年生れ）であるが、芦峠でガイドと猟師を職業とした人は、この2人で終わる。案内人の系統・新屋の中心である栄作、宗作兄弟は狩猟では利三組で、栄作はヤリを扱ってクマを射止める指し穴猟の名人であった。

狩猟を副業とする山案内人や猟師たちにとっては、猟は男気を高揚させる性である。ひとたび猟に出ると10日、時には40日ぐらい戻らなかった。獲物はクマとカモシカが主であったが、芦峠の狩猟について略記する。

夏期の山案内が終わり、12月に狩猟の準備をはじめると同時にカモシカ狩りにでかける人もいる。年明けと共に本格的にカモシカ狩りを開始し、2月中旬までつづく。

厳冬期の立山周辺は、連日のように吹雪がつづき、大量の雪が積もる。俊敏さを特徴とするカモシカも、雪に足をとられて行動が鈍くなり、犬に追いかけてさせると捕らえやすい。芦峠では深雪になるほどカモシカが捕れるため、深々と降る雪を「シシが降る」といって、多いときで1人が7～8頭は仕留めた。

カモシカは旧来、狩猟獣の対象で、日本の山村住民にとっては重要な資源動物であった。厳冬期のカモシカは、毛のつやもよく毛皮としては一番いい時期であり、防寒用や上等な敷物として珍重された。角の用途も多く、漁民たちはカツオ釣りに広く利用していた。そのうえ山村の貴重なタンパク源としての肉がうまい。

芦峠の定例行事である3月9日の山の神の祭りが終わると、それからほぼ40日間がクマ狩りのシーズンとなる。クマ狩りは5～8人が組を編成し、1カ月前後にわたって行動を共にする。炭焼小屋や岩屋、あるいは新しく小屋掛けして根拠地を設け、そこへ食料などを荷揚げして長期滞在できる態勢を整える。

芦峠のクマ猟は、昔はヤリを構えて一突きで仕留め

る指し穴猟が主体で、クマとの命がけの戦いであった。クマが冬眠から明けた直後の猟は、巻猟という猟法で、芦峠ではオイアゲと云っている。これは組員が一つの谷を取り囲み、追い手がクマを穴から追い出して、尾根などで待つ射手が鉄砲でしとめる猟法である。クマが冬眠する穴はサシ穴と呼ばれ、その場所を知っていることは組の財産であって、代々、極秘のうちに守り継がれ、家族にも教えなかったという。

クマの肉や臓器は貴重な食料であり、熊の胆は生薬として高価なもので、毛皮も高値で取引された。

芦峠特有の狩猟時の身なりについて、特に説明を加える。昔の猟師は綿入れや毛皮の防寒衣を着込み、“雪バカマ”と呼ぶモンペのようなものをはいた。足ごしらえは、シナの木の皮で編んだスネ当てと“ウソ”というワラグツを履いた。そのワラグツに深雪の時は輪カンジキをはき、凍った雪面では、3本爪の金カンジキをつけ、ワラや縄で編んだカゴ（リュックサック）を背負い、深い雪ではバンパと称する雪を処理する道具で除雪しながら道をつけて獲物を追っていた。

芦峠の猟師の慣習として、組頭や古参の猟師は、ウソのかわりにカモシカの毛皮で作られた“ソッペ”と呼ばれる足袋を履く。ソッペは水に濡れても決して冷たくなならない、いわば防寒靴みたいなもの。そのソッペは各自勝手に作ることが許されない。熟練者のみが着用を許され、猟師のシンボルとされた。一人前の猟師となり組頭格に技量が認められると、ソッペとカモシカの手袋が与えられた。命を賭して行う仕事は、豊富な体験を要し厳格な主従関係を示す一つの証でもある。

#### (4) イワナ釣りや猟の基地 平ノ小屋集団

平（古名：中ノ瀬平）を通る山道の歴史はかなり古い。信州と越中を結ぶ最短距離の中継点がこの平であり、かなり以前から信州人などの立山登拝道に利用された。針ノ木峠を越え、平を通過し立山温泉から松尾峠を越えて禅定路に入ったが、このコースは“抜け詣り”といって禁じられていた。しかし、多くの通過記録が残されており、立山詣での裏街道であった。旧暦、1584（天正12）年11月末に、富山城主・佐々成政がこのコースを通過して浜松城の徳川家康を訪れたと言われている。

芦峠には釣りの名人が多い。なかでも平ノ小屋を管理した戦前の志鷹弥三太郎（1894・明治27年生れ）と戦後の佐伯覚英（1908・明治41年生れ）があげられる。

覚英は弥三太郎に釣りの極意を尋ねているが、弥三太郎は「釣りというもんは、自分でやってみて、どんなところにイワナがいて、どんな毛針を使ったらいいが、膚で覚えるもんだ」というのみで、具体的なことは何ら説明がなかったようだ。つまり“経験から要領を学ぶ”という芦峠の伝統とも云えるものである。

芦峠ガイドは、ほとんどの人はイワナ釣りが好きで、登山の案内中であっても“川のウジ虫退治”と言い訳しながら釣り竿を振るうことがある。川を通過する案内では、ほとんどの芦峠ガイドは釣り糸を持ってゆく。けれども弥三太郎と釣りを競えるのは、強いて上げれば名案内人・宗作だけだったようだ。

1917（大正6）年6月、平ノ小屋を芦峠の志鷹弥三太郎が管理した時から、小屋は芦峠の人たちの猟場であり釣り場であった。初夏から秋まではイワナ釣りが主であるが、積雪期はカモシカやクマ狩りの基地となる。つまり、積雪期に入ると登山者が少なく、山案内の副業として猟を行っている人や猟師の溜まり場となり、ゆっくりくつろぐことができる憩いの場でもあった。時には酒宴の会場となり、まるで別荘のような感覚で利用していた人もいた。1日の猟を終え、小屋に戻ってヌクイ谷の露天風呂に浸り、秋場に捕ったイワナの塩焼きで一杯飲む味はまた格別だったようだ。

カモシカの肉やイワナで食いつなぎ、カモシカの皮でソッペ（足袋）や手袋をつくる。さらに肉を干し肉にして長くもたせ、山菜が芽吹けば味噌汁の材料だ。

そんな生活で平ノ小屋には40日ほど根付く人がいたという。

江戸時代の黒部奥山は加賀藩に管理され、黒部川おしまりやま一帯は御締山であって入山できなかった。明治維新の1870（明治3）年9月、奥山廻り役は廃止になり、以降、黒部川でイワナを釣ることやクマやカモシカを獲ることなどが解禁になる。平ノ小屋は信濃国平村生まれの遠山品右衛門（本名・里吉、1851～1920）が、解禁になった翌年の1871（明治4）年に、掘っ建て小屋を建ててイワナ釣りをやったことが始まりで、品右衛門はそこを根拠地として40年余り釣りや猟をやっていた。

品右衛門は黒部源流が庭の一部であり、北は白馬、南は槍ヶ岳まで猟を行っていたが、高齢になって小屋の権利を放棄した。その後、大林区署（のちの営林署）で小屋を山小屋として機能させるために建て直す。その小屋の管理は平蔵を通じて弥三太郎が担うこととな

り、弥三太郎は1917（大正6）年6月から好きな釣りと猟に励み、のちに黒部の主となる。

信州の遠山品右衛門と志鷹弥三太郎は、山を知悉していることでは他の猟師の追従を許さないが、2人とも釣りと猟で生活し、品右衛門は山案内をほとんどやらず、弥三太郎は遭難の捜索などにはよく出向いているが、山案内人の免許もとらず本格的な山案内は少ない。ただし、平ノ小屋では多くの登山者が食料の補給や、黒部源流の山や谷の状態を教わり、川や谷を歩くには天候の予測が最も重要であり、2人の的確な予測によって登山者は相当多くのアドバイスを受けている。

夏の平ノ小屋における大事な仕事は、黒部川で毎日のようにイワナを釣ることであった。それは宿泊者の食膳に、平ノ小屋名物である捕れたばかりのイワナを添えるためである。他に燻製にして信州の上高地からくる仲買人への販売や、時には登山者に分けることもあった。この生活ではイワナ釣りが自然に体得でき、上手になるわけだ。

弥三太郎は、新雪がきても1人で年の暮れまでは平ノ小屋にとどまっていた。

降雪量が多く寒さも厳しい2月から1人で平ノ小屋にこもって猟をやっていることもあった。それは下界の煩わしい雑事よりも、自分の好きなおところで猟をすることを選んだのである。

この平ノ小屋で、ゆっくり猟でもやろうと、1926（大正15）年2月に亀蔵、宗作、房重、志鷹弥三太郎・光次郎兄弟の5人が、平ノ小屋へ行く途中の真川で、雪崩に遭って亀蔵が死亡。1951（昭和26）年3月には、平ヘクマ狩りに行った5～6人のうち、ヌクイ谷の雪崩で伝四郎、伸平を失い、吉二が大怪我を負うなど悲惨なこともあった。

戦後の平ノ小屋の管理は覚英のあと、覚秀（1936・昭和11年生れ）、覚憲（1965・昭和40年生れ）の3代がつづき、小屋の管理とともにイワナ釣りと黒部湖の渡し舟を運転しながら黒部川中央部を守っている。

#### 4. 芦峠ガイドの系譜

次の基準にしたがって集録した。

(1) 収載した人びと。

①旧山案内人のうち、芦峠在住の人と、その人に密接なかわりのある人。旧山案内人とは次の人びとをいう。

イ. 日本山岳会機関誌『山岳』第13年第1号（1918

年12月刊)の「越中立山村芦峯寺の登山案内者(立山登山口)」に収載された22名のうち21名。

ロ. 日本山岳会編『山日記』1930(昭和5)年版から1954(昭和29)年版までの「山案内」欄に収載された「立山案内人組合」(名称が変わっている年がある)の人びとのうち芦峯の人。

ハ. 上記「イ」「ロ」以外の山岳文献に載っている芦峯在住の実質的な山案内人および山小屋経営・管理者。

1918(大正7)年以前の山案内人と、1918年12月～1930(昭和5)年6月の間に高齢などで山案内を引退した、あるいは死去した山案内人。つまり、前記「イ」以前の人と「イ」と「ロ」の間の欠落期間に活動した芦峯の山案内人を指す。

②立山ガイド協会会員、山小屋経営・管理者、太平洋戦争後の山岳遭難救助に出動した人、富山県警察山岳警備隊隊員の人びとのうち芦峯の人。

山岳警備隊隊員は、山岳遭難防止・救助活動が主な任務であることから山岳ガイドと符合しているので、特に取り上げた。

③芦峯の人の親族で、嫁ぎ先の人山案内人(山岳ガイド)、山小屋経営・管理者、富山県警察山岳警備隊隊員。

(2) 山案内を補佐的・臨時的に行っていた次の人々は系譜から除いた。

①立山登拝登山案内人である中語。

②山案内実績が僅少の人。

日本山岳会編『山日記』に収載されてはいるが、戦前1・2年の収載で、芦峯での聞き込み(1999～2010年の間)では、ほとんど山案内をしていない、あるいは芦峯ガイド以外の遭難の捜索に向いたことのない人。

③戦後短期間、立山のみ山案内人。

1930(昭和5)年以降に生まれて、戦後の数年間、立山周辺のみ山案内人。

(3) 系譜の掲載順序は、原則として山案内人の黄金時代に活動した(系譜の2列目にあたる)一族のうち、山案内人の年長者順とした。

(4) 氏名の前の符号は次の内容を示す。

●=無雪期・積雪期の山案内人。

▲=夏山のみ山案内人。1876(明治9)年以前(概ね1921・大正10年12月、芦峯でスキーをはじめた時点で45歳以上)に生まれた人のうち、

冬山案内不明の人は夏山のみ山案内人とした。

★=現在の「立山ガイド協会」に所属している(いた)人。

◆=「立山ガイド協会」には所属していないが、実質的に山岳ガイドである(あった)人および富山県警察山岳警備隊に勤務している(いた)人。実質的な山岳ガイドとは、1954(昭和29)年以降1991(平成3)年4月の間に死去した山岳ガイドを含む。

▼=雄山神社宮司。山小屋経営・管理(小屋番を含む)にたずさわっている(いた)人で山案内が僅少の人。

・=芦峯の山案内人・山岳ガイドとの密接な関係者。

(5) 氏名の旧漢字は原則として新字体に改めた。

(6) 「一山屋号」とは、芦峯中宮寺(現・雄山神社)に奉仕した衆徒(33坊)・社人(5社人)から構成されていた宗教組織である一山会(明治維新の廃仏毀釈後は、立山講社や立山教会と改称して維持されていた)の屋号をいう。

(7) 氏名の右の( )は「生年」「没年」を西暦で表すが、「生年」は数え年から算出した人がおり、1年または『山日記』の調査日によっては2年の誤差が生じている場合がある。「\*」印は不明を表す。

(8) 略号「G」は山案内人・山岳ガイドを示し、富山県を「県」と略す。

(9) 養子・婿の人は、原則として養子・婿先に山関係事項を載せた。

(10) 下記の事項は、系譜における文言を省略するため、該当する芦峯ガイドには○に数字のみを示して諸事項の表示に替えた。

①=『山岳』第13年第1号(1918・大正7年12月刊)の「越中立山村芦峯寺の登山案内者(立山登山口)」収載者22名のうち21名。

②=1923(大正12)年1月、板倉勝宣が松尾峠で疲労凍死した時の榎有恒、三田幸夫、板倉勝宣一行のガイドを行った10名。

③=②の松尾峠遭難の救援に向いた10名のうち8名。

④=1923(大正12)年2月、名古屋の伊藤孝一行の案内人として雇われ、大町から入山した伊藤一行を出迎えるために立山温泉から信州方面へ出向き、案内人のみで厳冬期の針ノ木峠越えの初踏破をなし遂げ、伊藤一行と信州の山案内

人が停滞していた大沢小屋で合流した8名。

⑤ = 1924 (大正 13) 年 3 ~ 4 月、名古屋の伊藤孝一一行の積雪期上廊下の赤牛沢付近から上流、雲ノ平、黒部源流の初踏破と黒部五郎岳、鷲羽岳の初登から槍ヶ岳までの縦走に同行した 22 名のうち 21 名および真川小屋に常駐した案内人の妻 3 名。

⑥ = 1930 (昭和 5) 年 1 月、雪崩による剣沢小屋倒壊時の 2 回目の捜索に向いた 33 名 (通信員と 2 役の豊吉を含む) のうち 32 名。

1 回目の 3 名は系譜にその旨記した。

⑦ = ⑥ の 2 回目捜索時の連絡の任にあたった通信員 13 名。

⑧ = 1961 (昭和 36) 年 1 月、富山大学山岳部部員の赤谷山遭難で、第 2 次捜索隊に向いた 15 名。

⑨ = 1969 (昭和 44) 年 1 月、赤谷山を中心に剣岳周辺で遭難者が続出し、その救助に向いた 6 名。

(11) 登山にかかわりのある職業に限定して、山案内以外の職業を記した。

(12) 山小屋の経営・管理、勤務先と役職名、団体・組織の会員などは、過去と現在に分け、現在その任務・役職にたずさわっている人、団体などに所属している人のみ「現○○○」と表示した。したがって過去を示す「元」とか「前」は省略した。

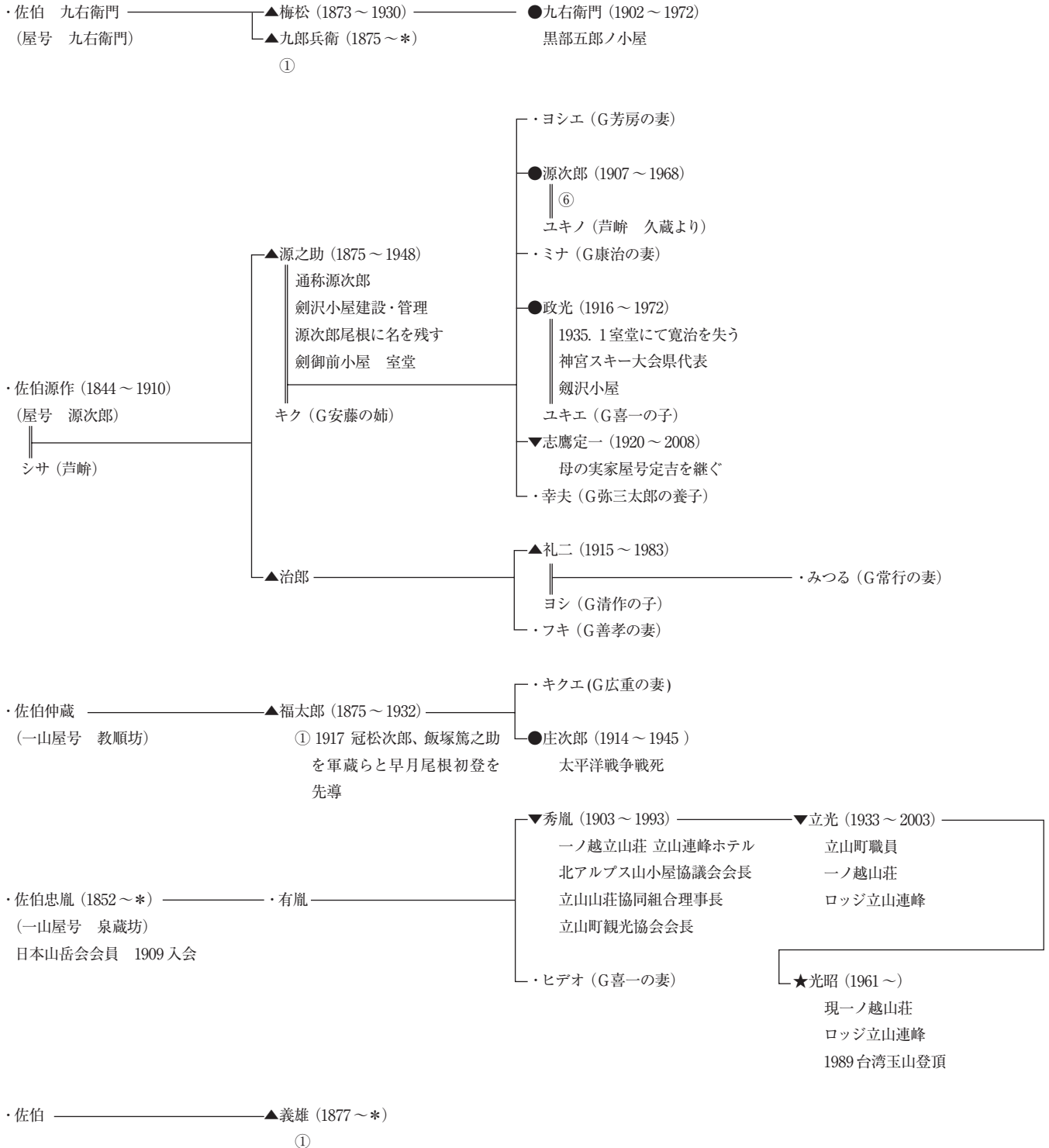
(13) 学校・会社・登山者個人の「専属ガイド」の目安は次のとおり。

① 芦嶺の人たちが当該団体や個人の専属ガイドとして共通の認識があった。

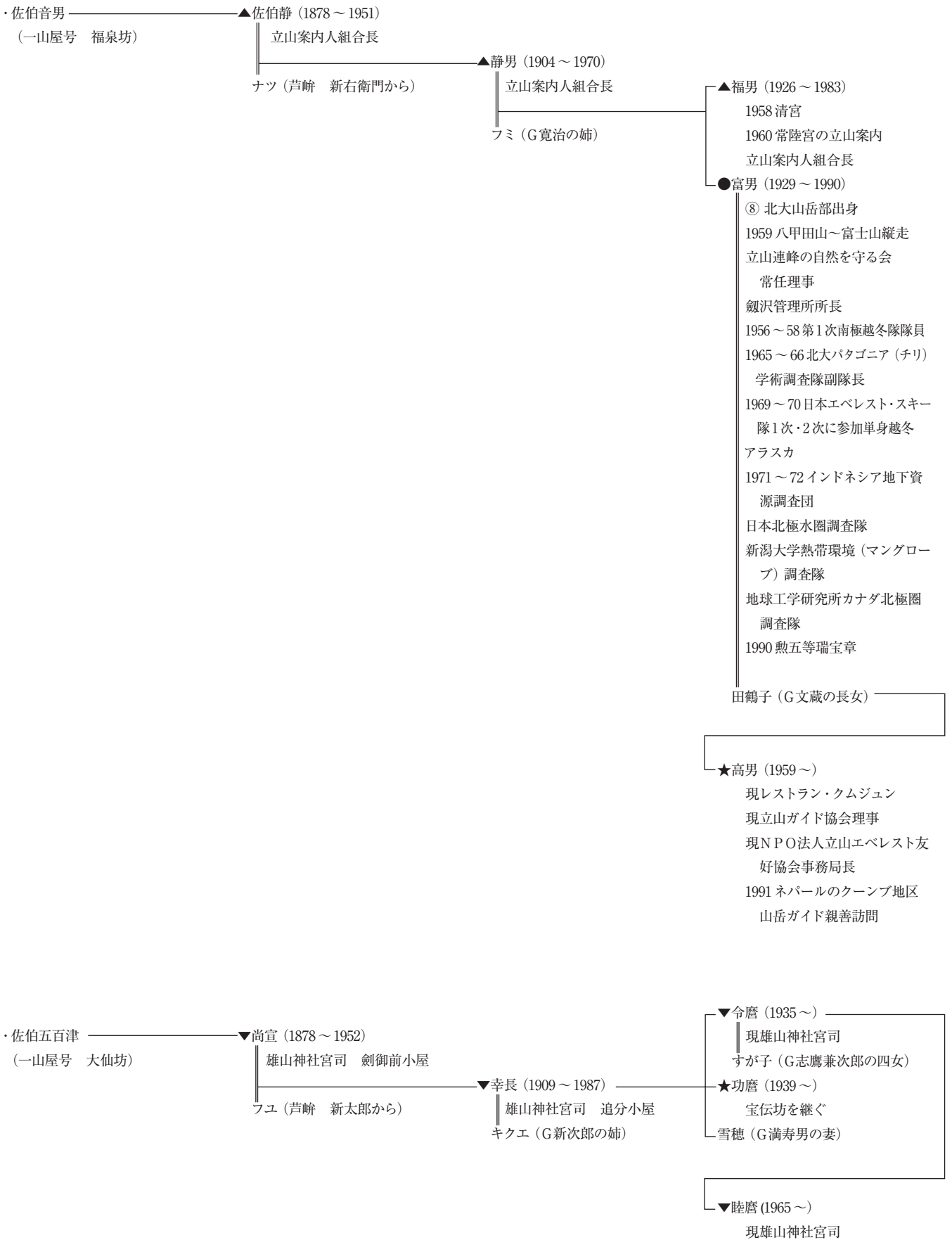
② 登山団体および登山者個人より複数回「さしくち」(指名) があった。

③ 1 団体に 5 回以上の山案内を行った。ただし、山岳文献すべてを調査していない。

# 芦嶺ガイドの系譜



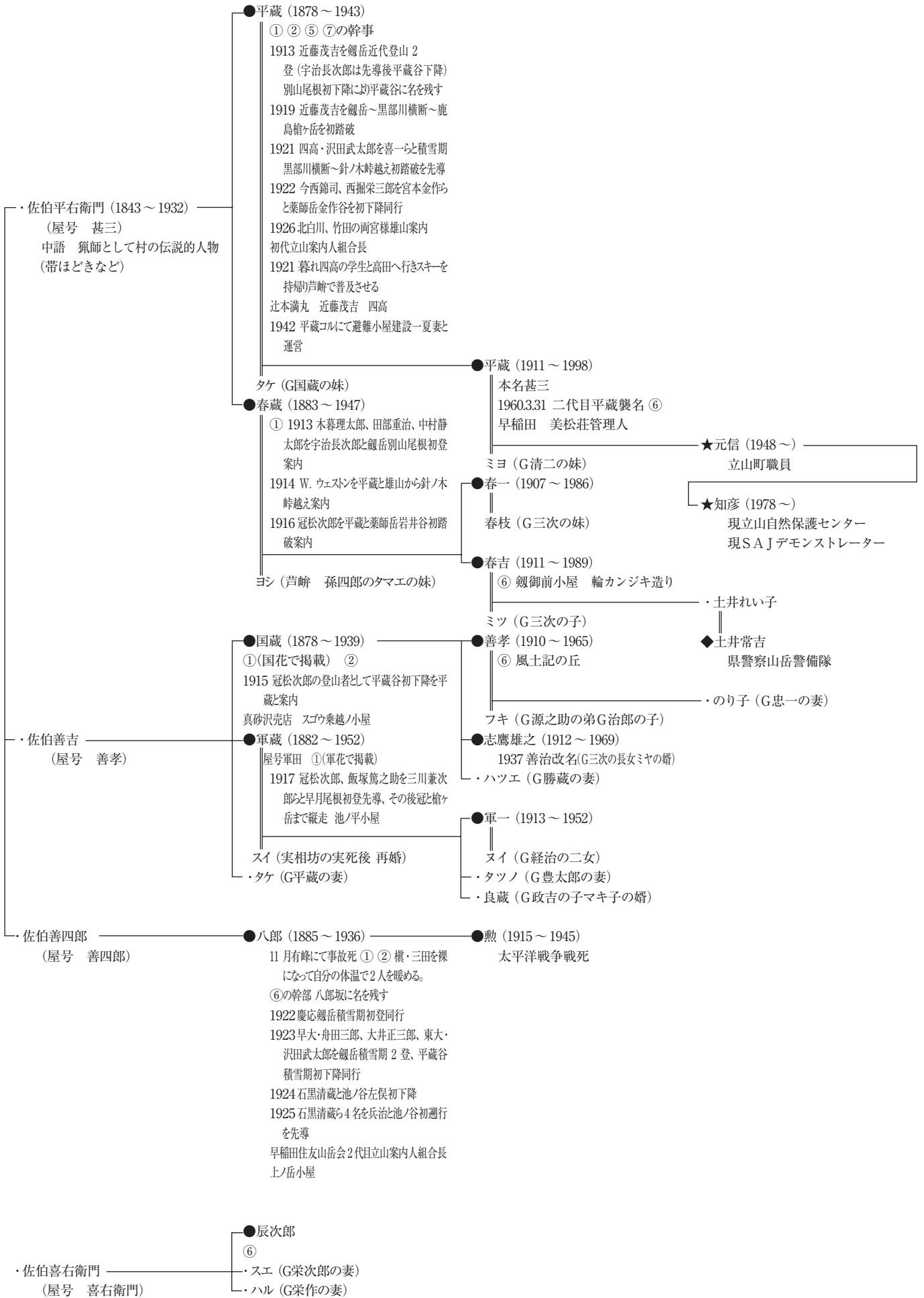
芦峯ガイドの系譜



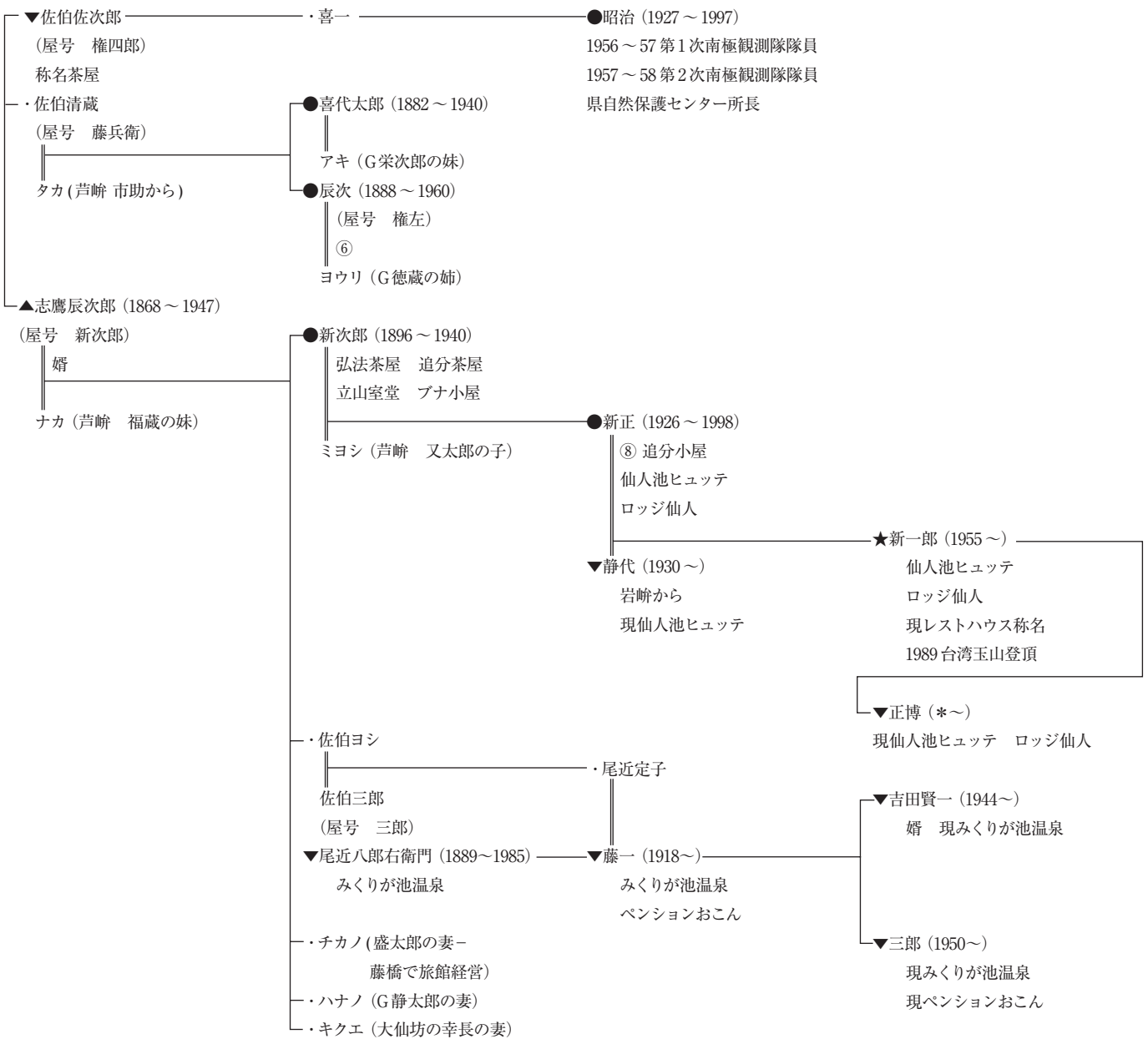
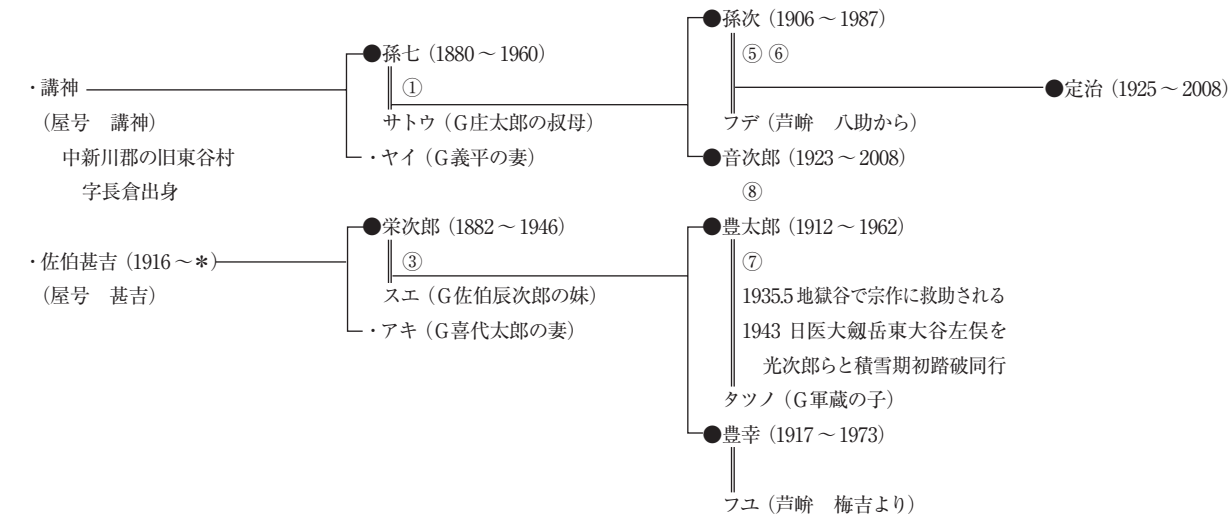




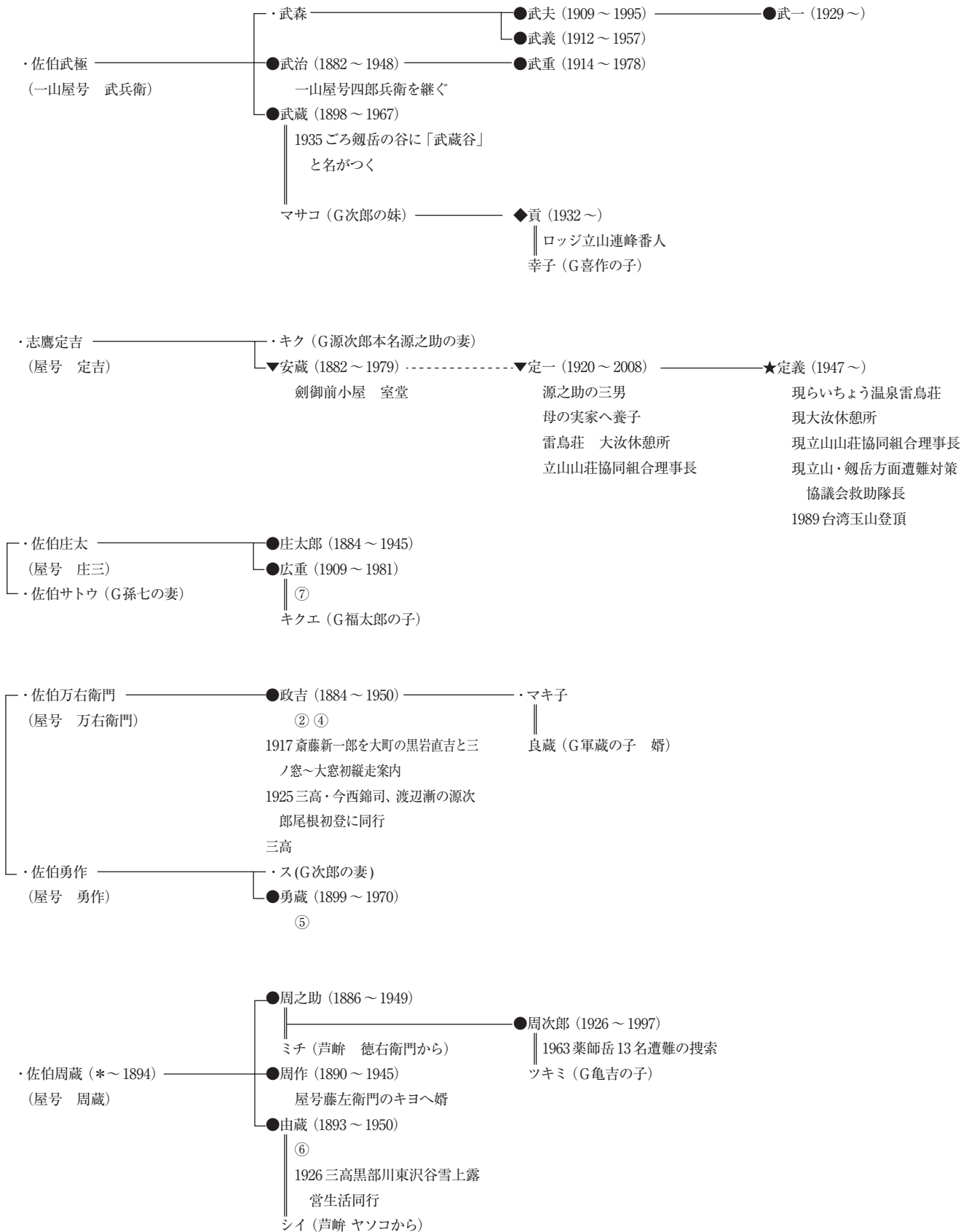
芦嶺ガイドの系譜



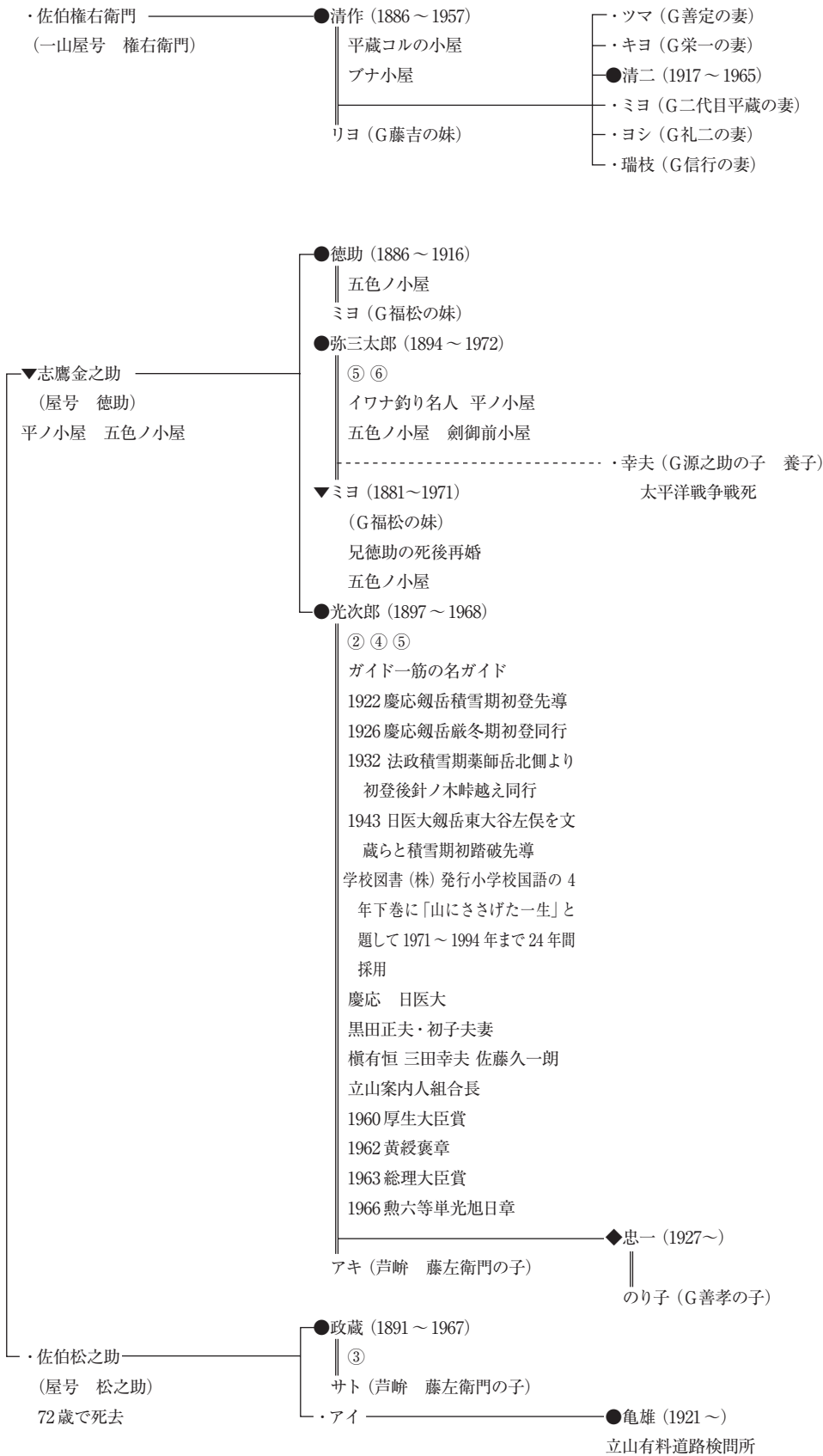
五十嶋 一晃



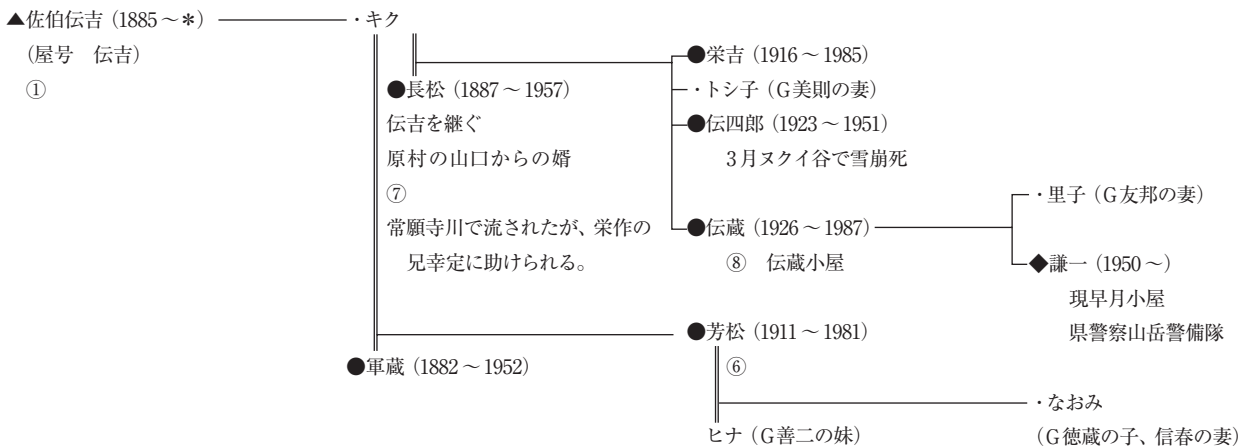
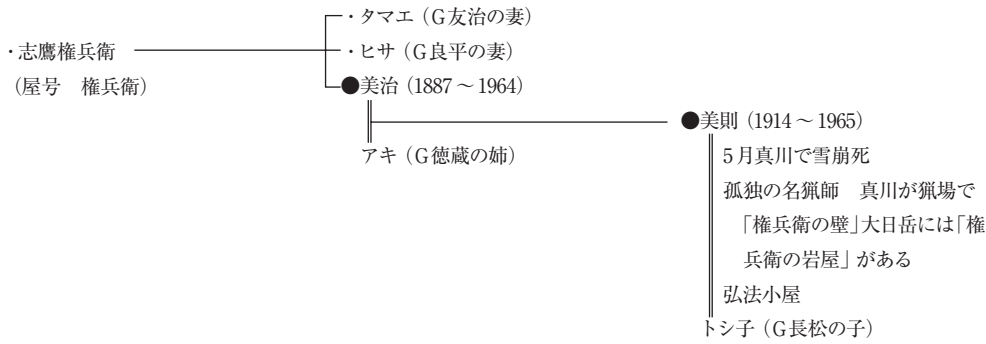
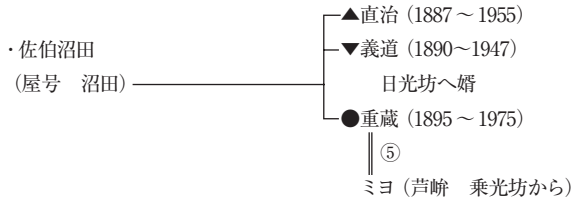
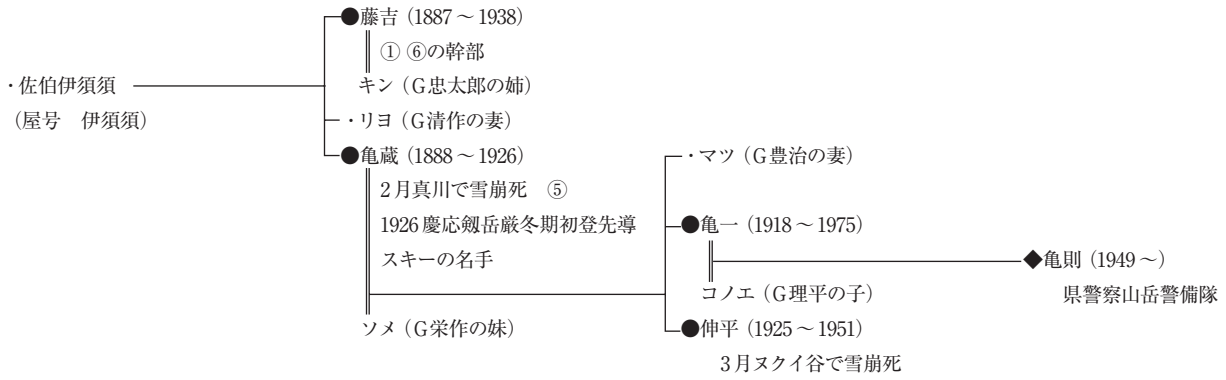
芦嶺ガイドの系譜

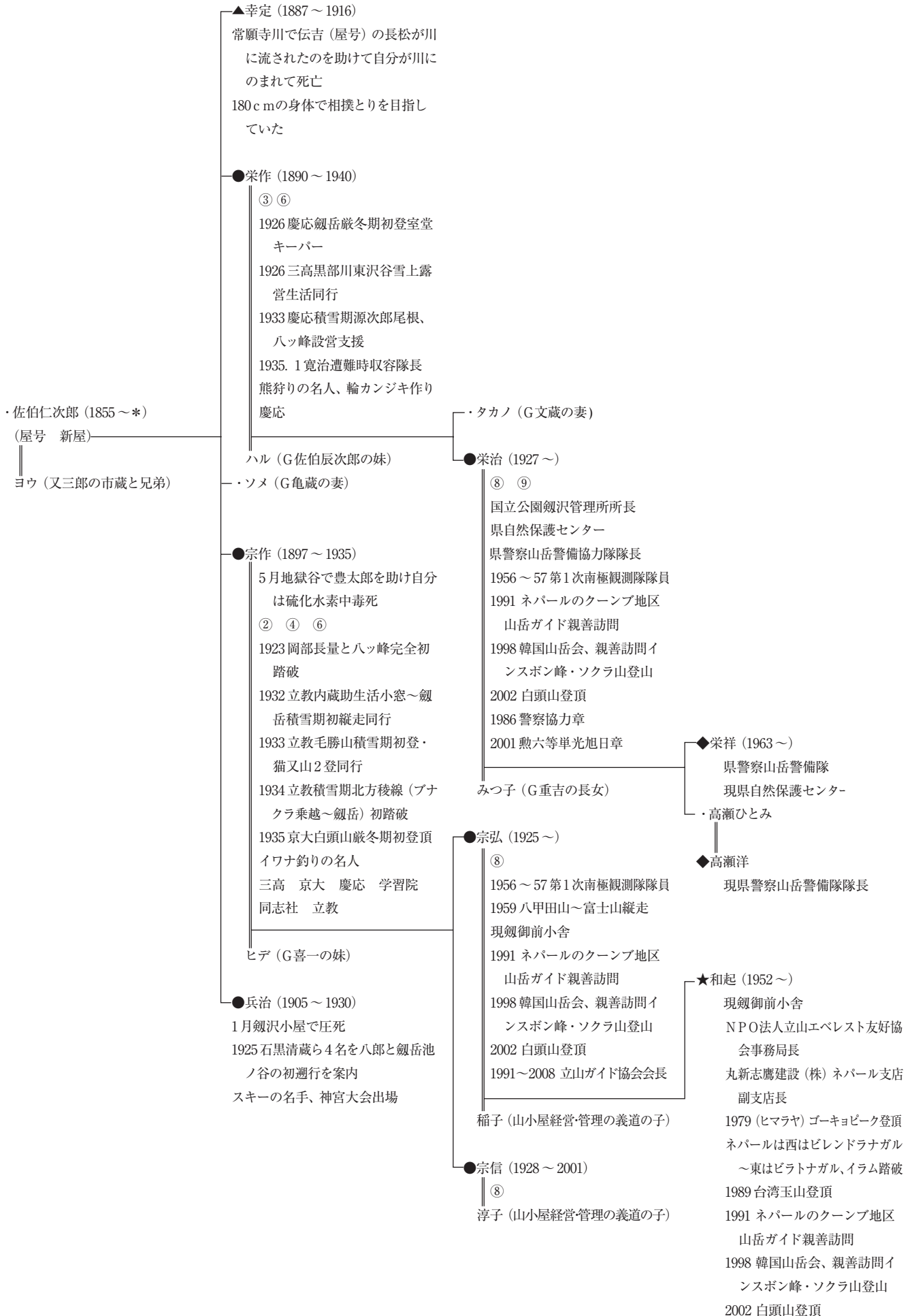


五十嶋 一晃

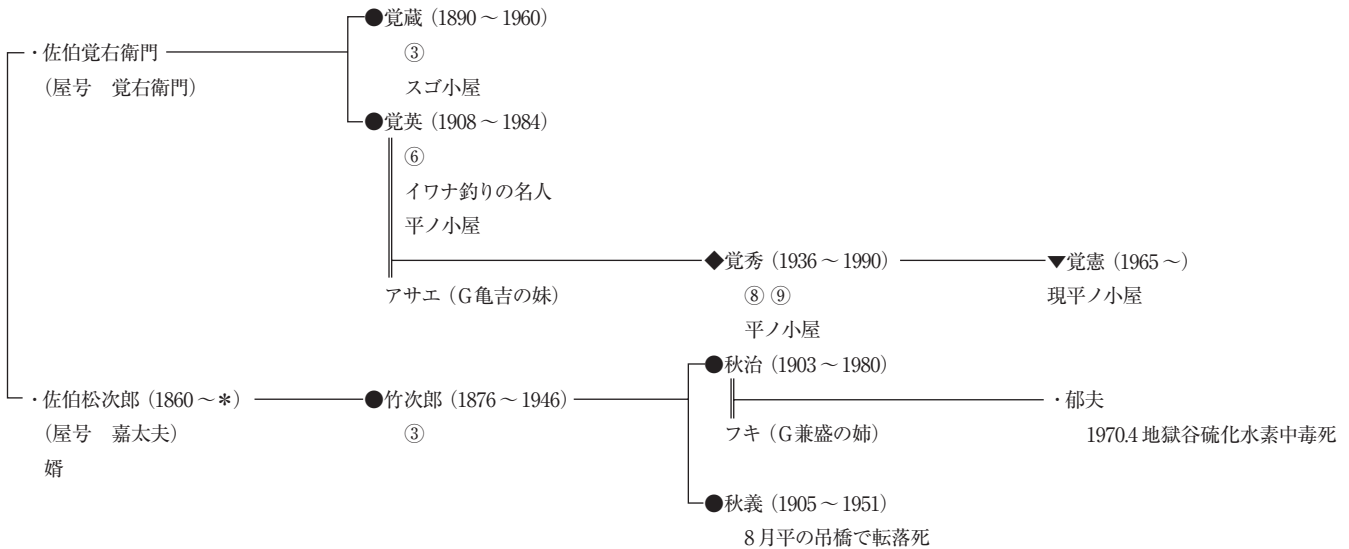
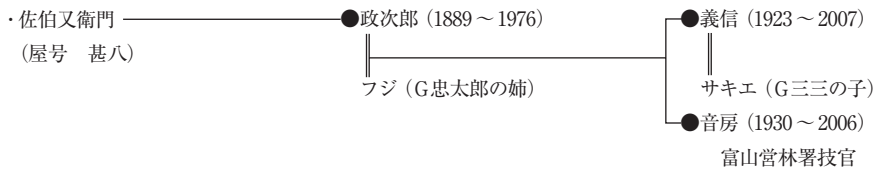
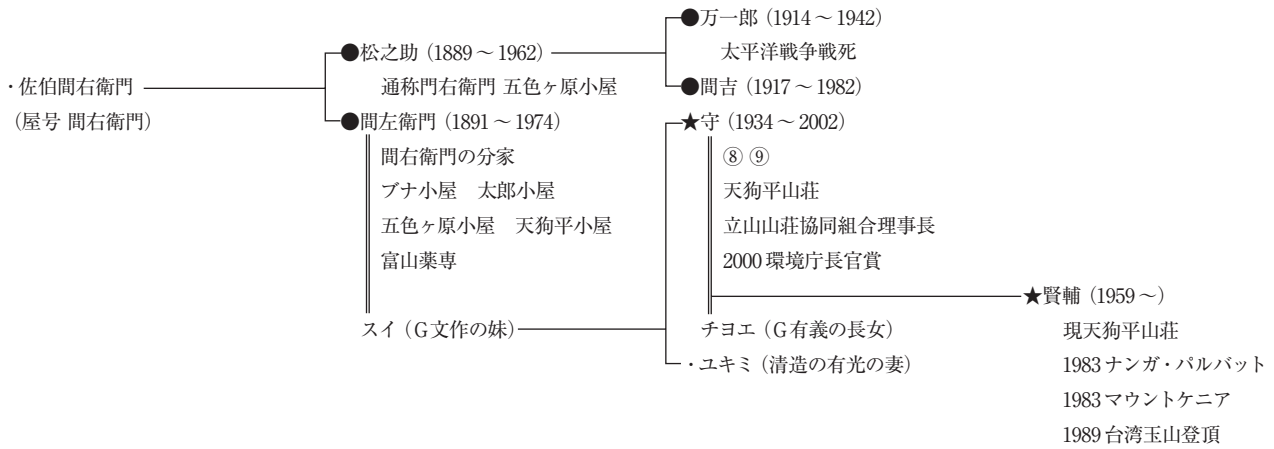
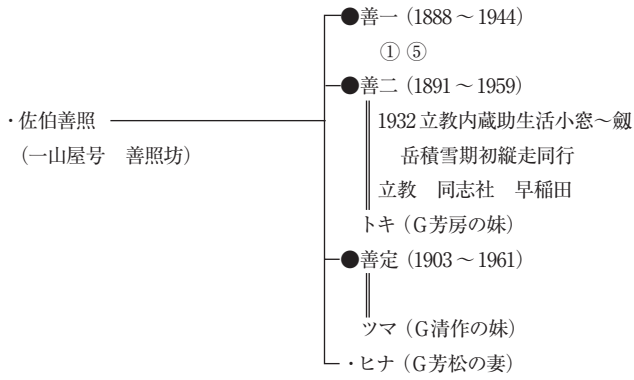


芦嶺ガイドの系譜

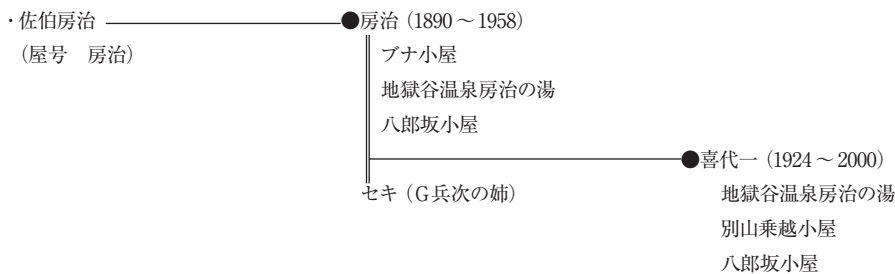
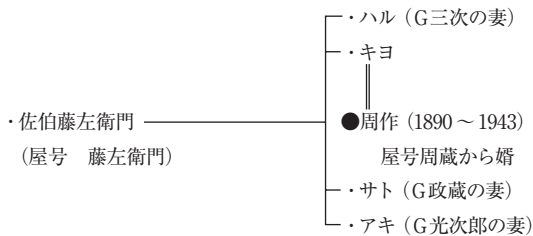
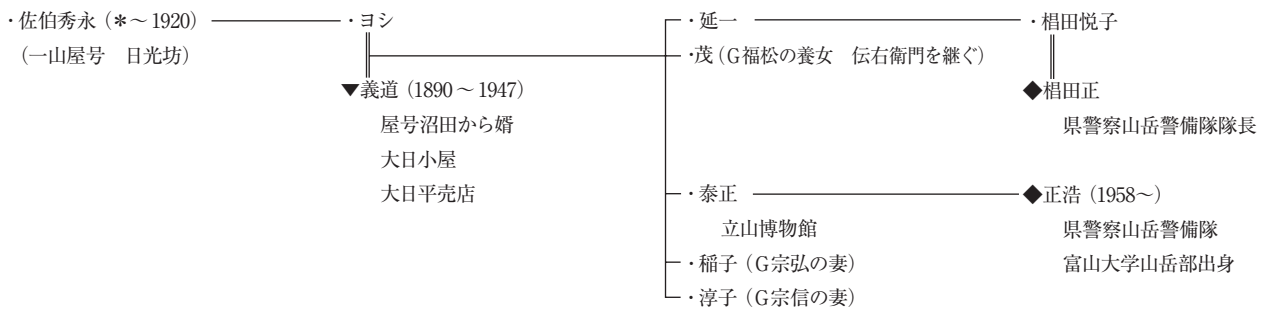
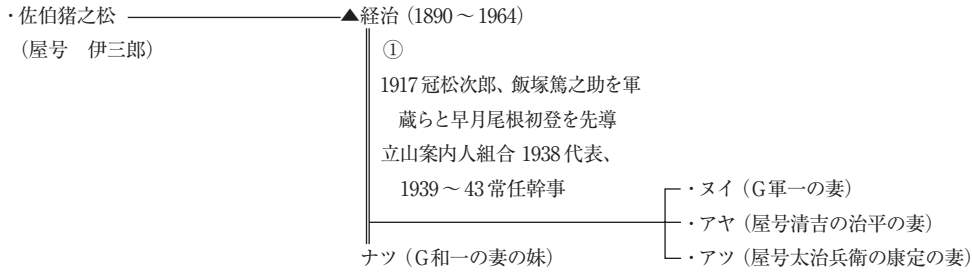
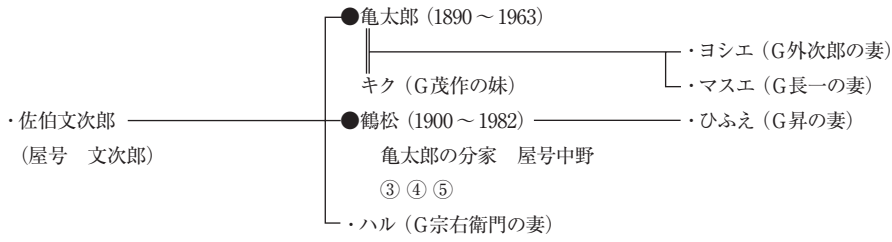




芦嶺ガイドの系譜

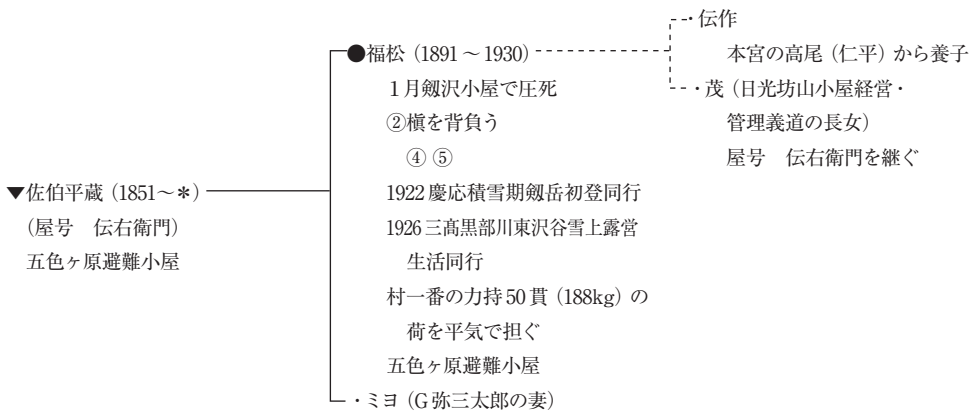
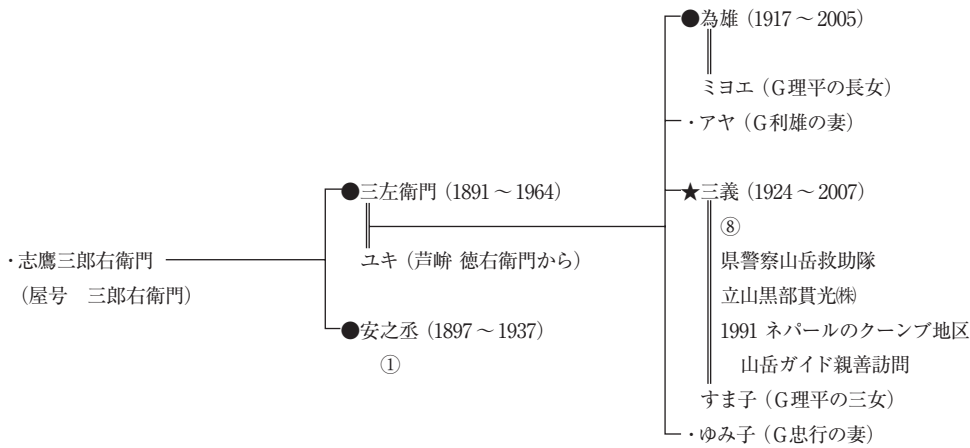
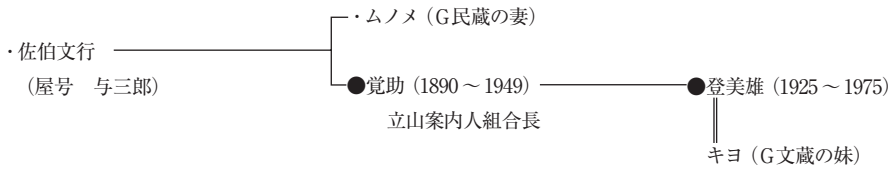
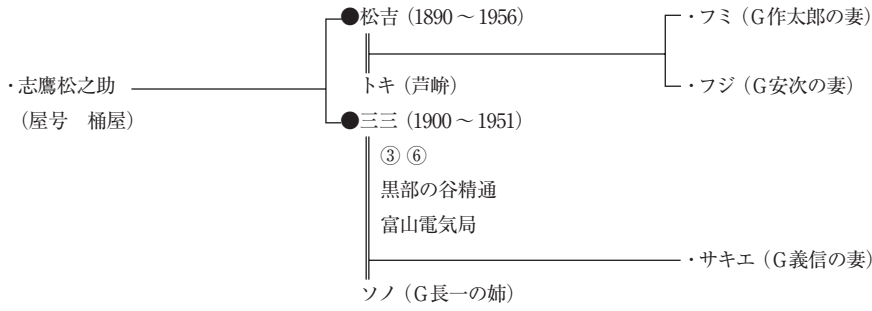


五十嶋 一晃

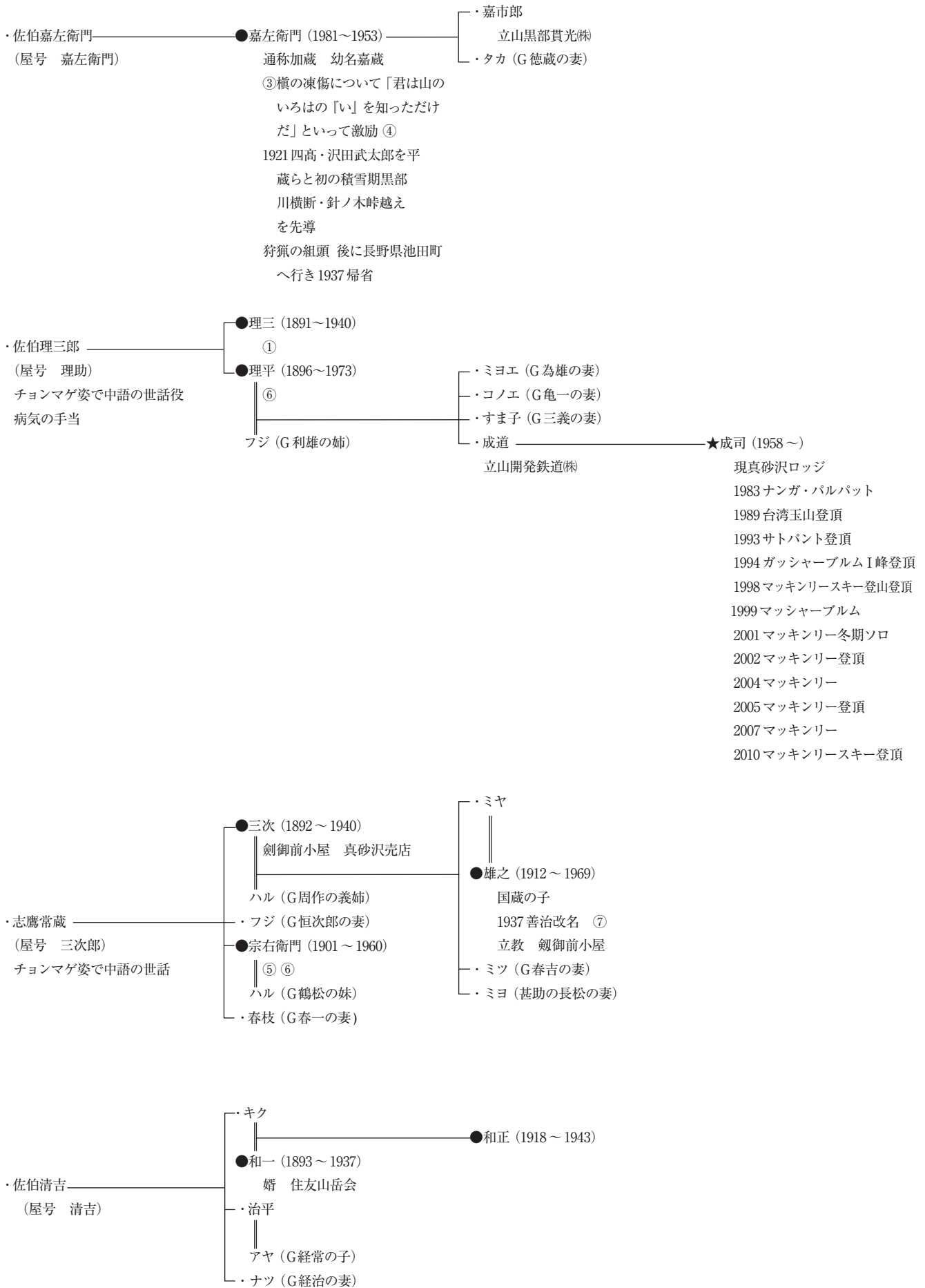




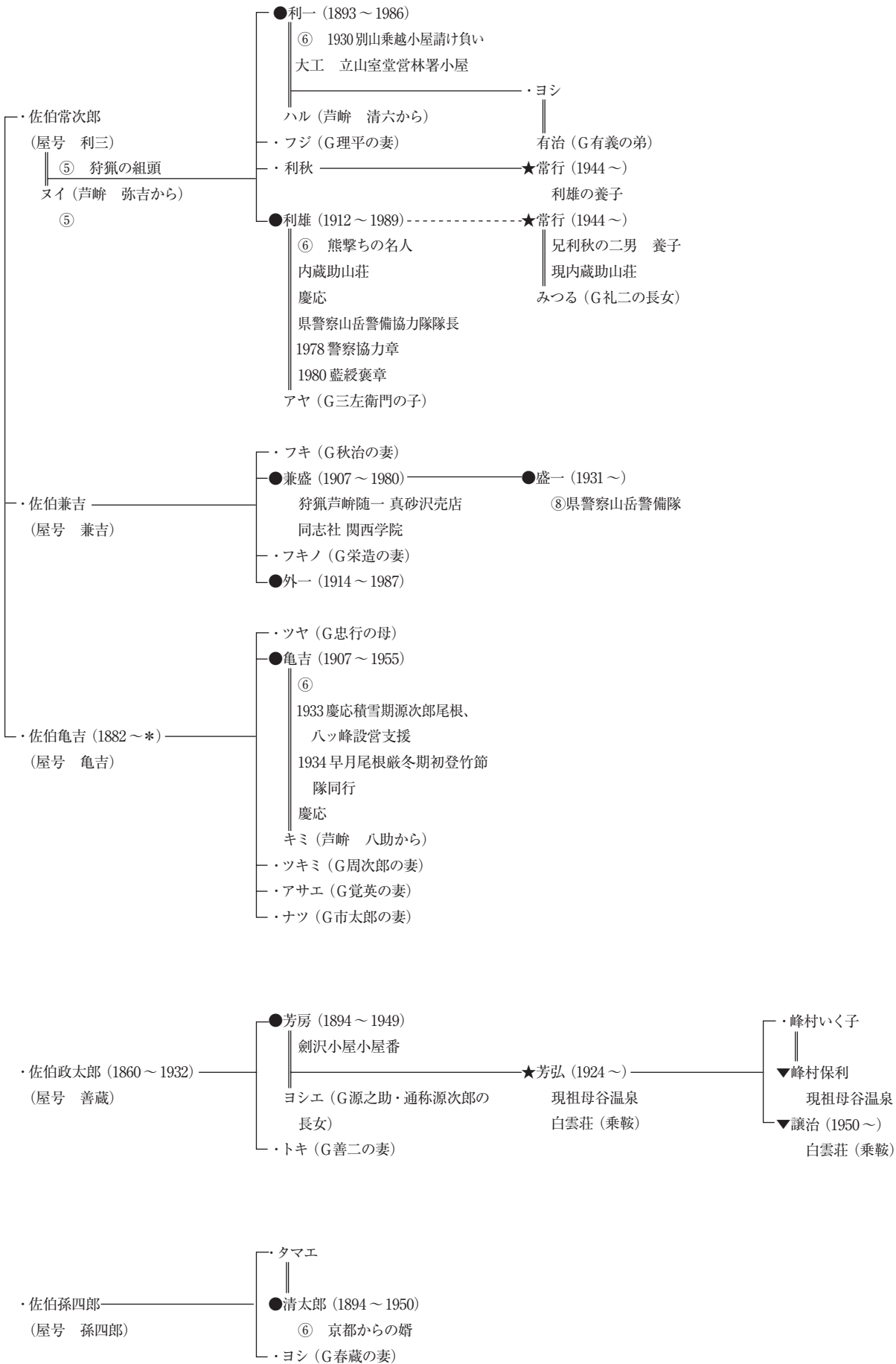
芦嶺ガイドの系譜

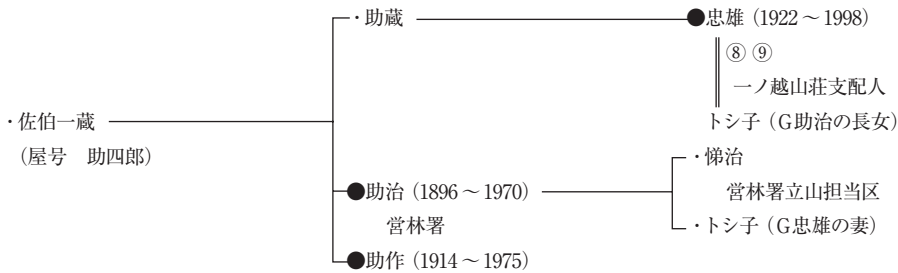
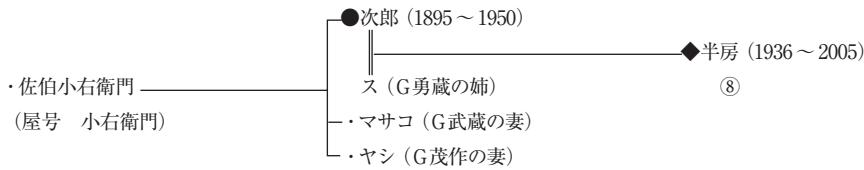
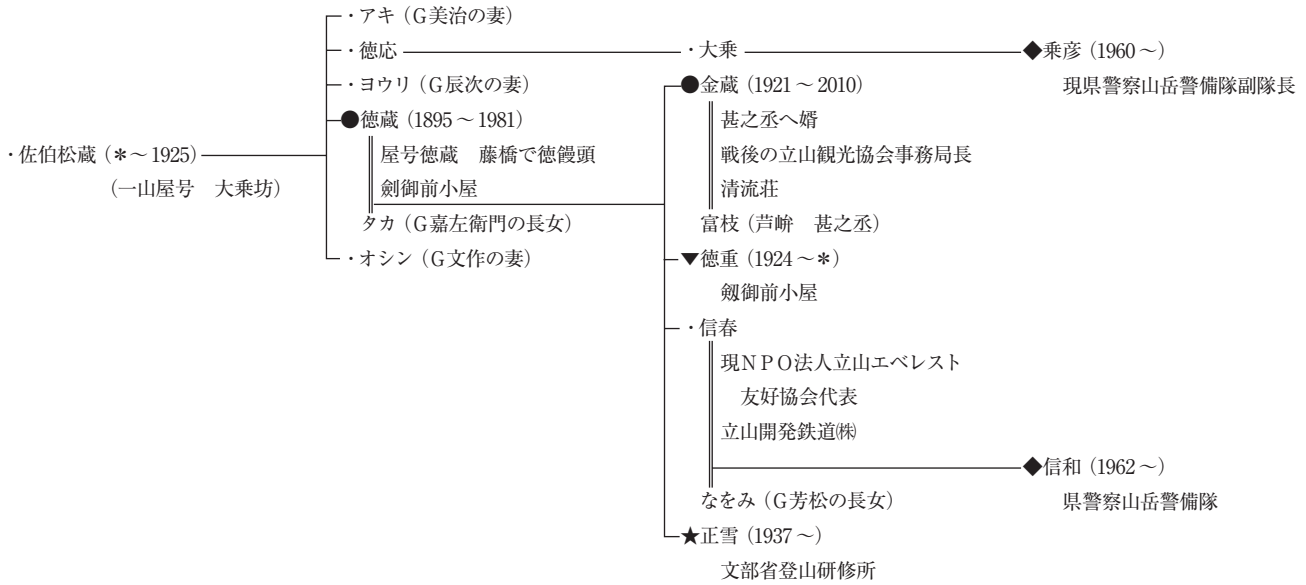
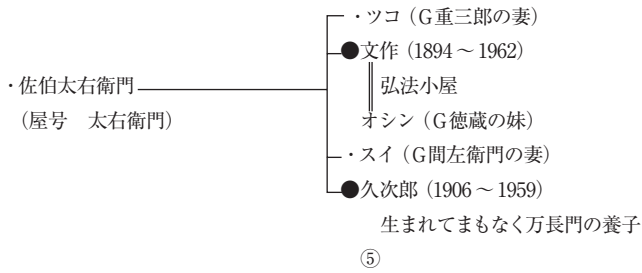


五十嶋 一晃

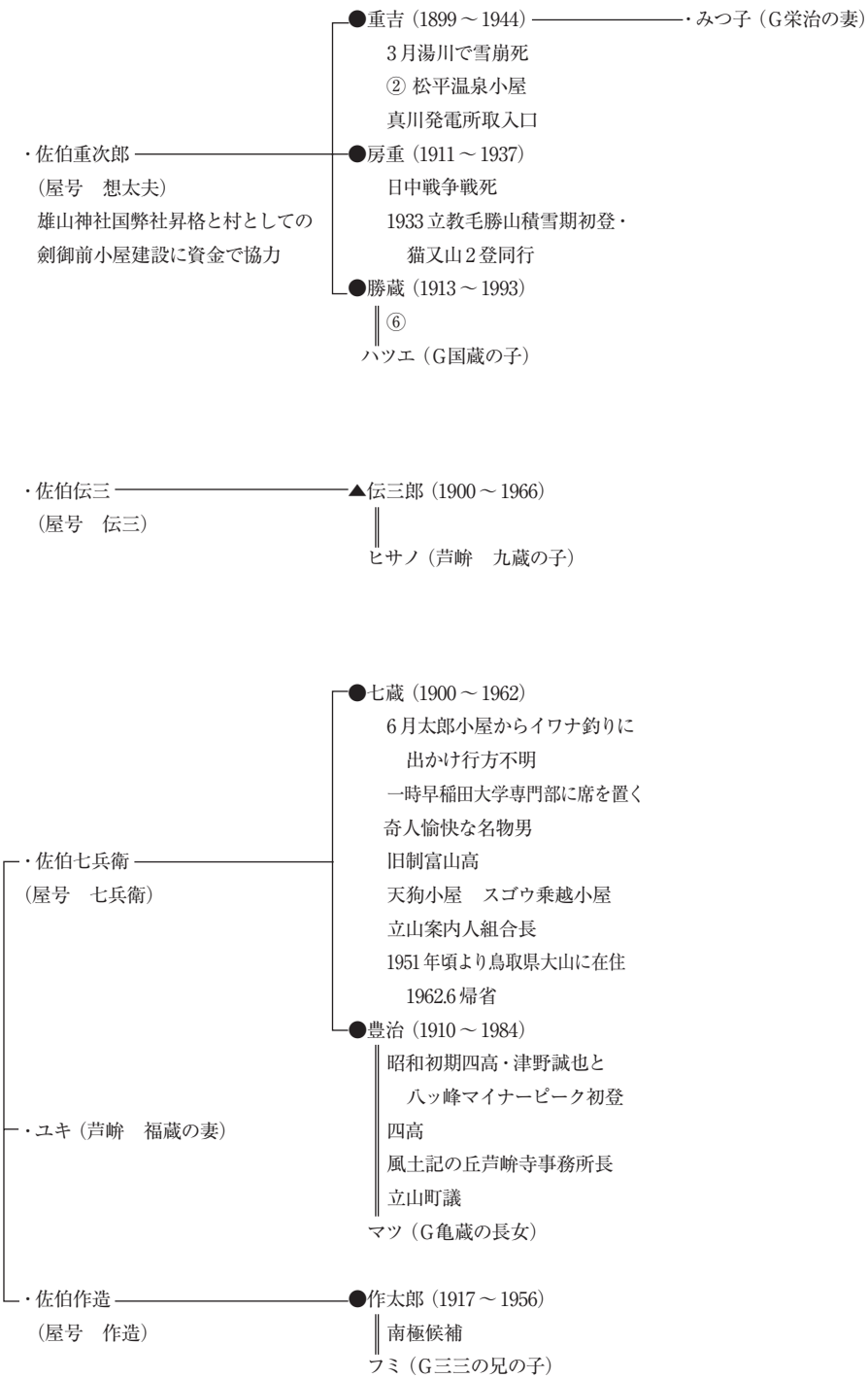


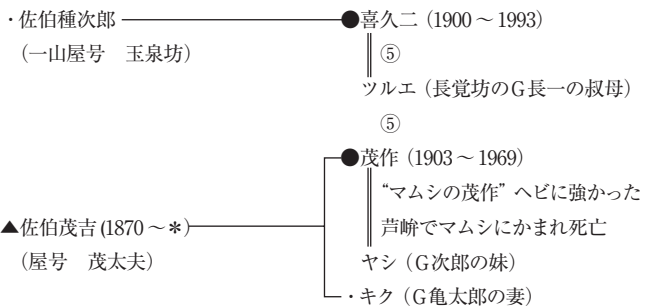
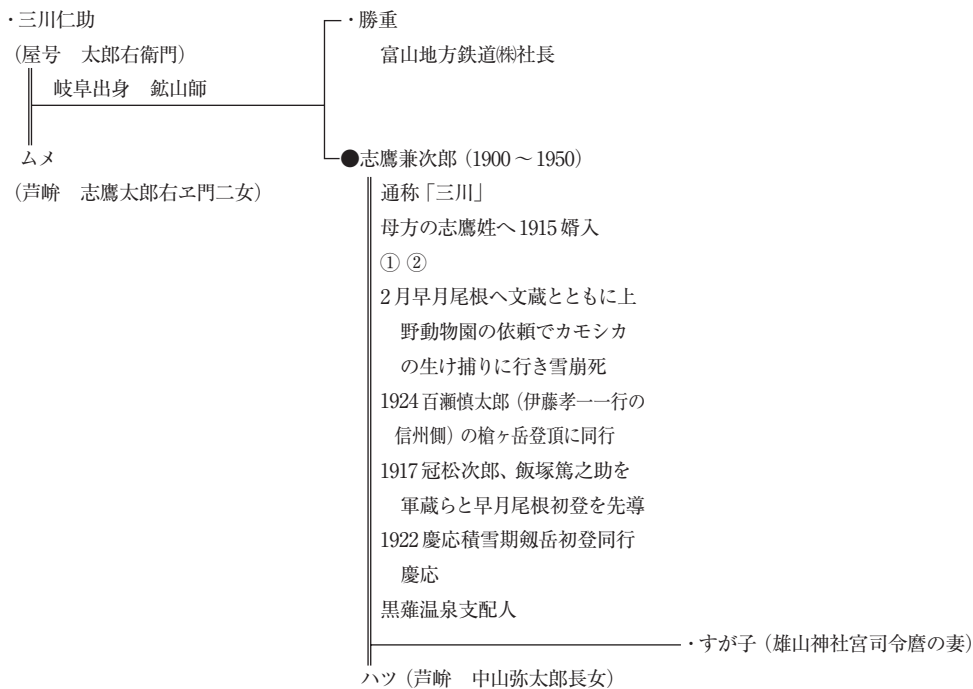
芦嶺ガイドの系譜

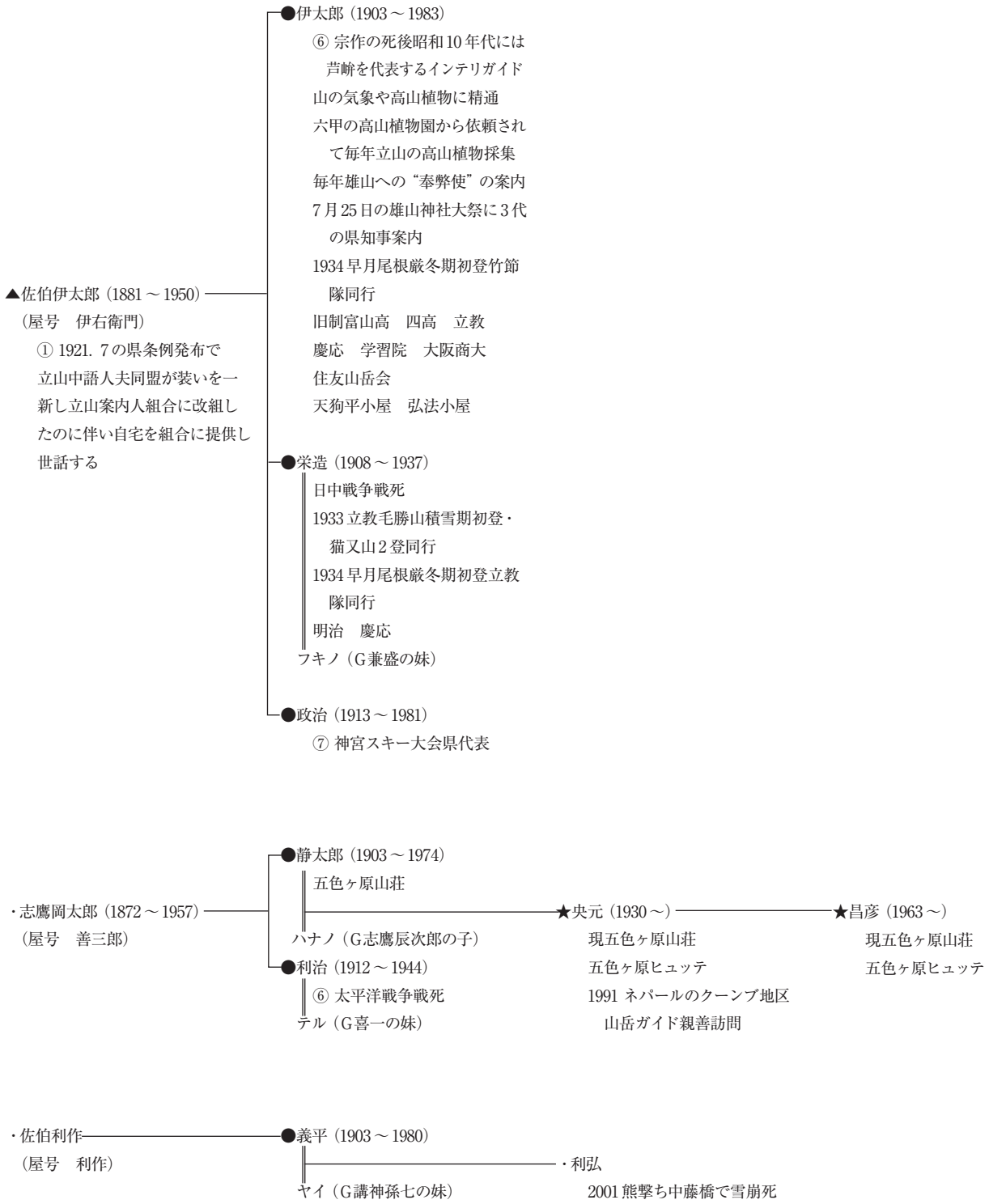






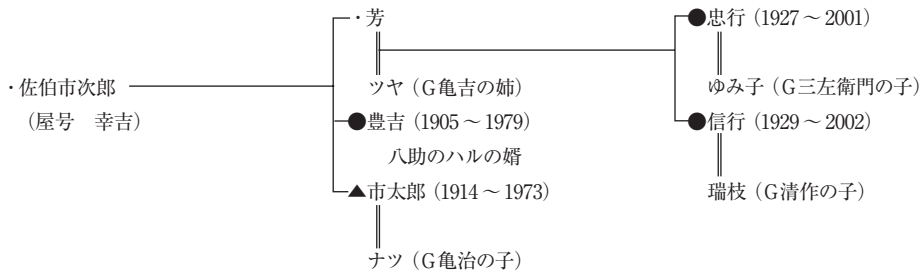
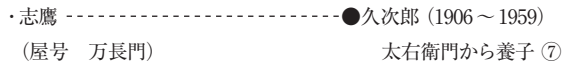
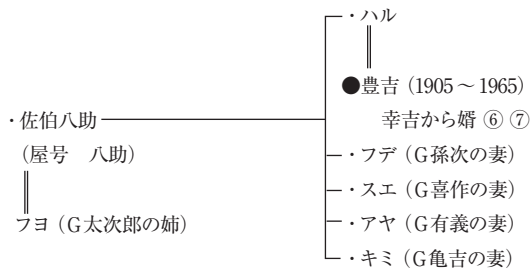
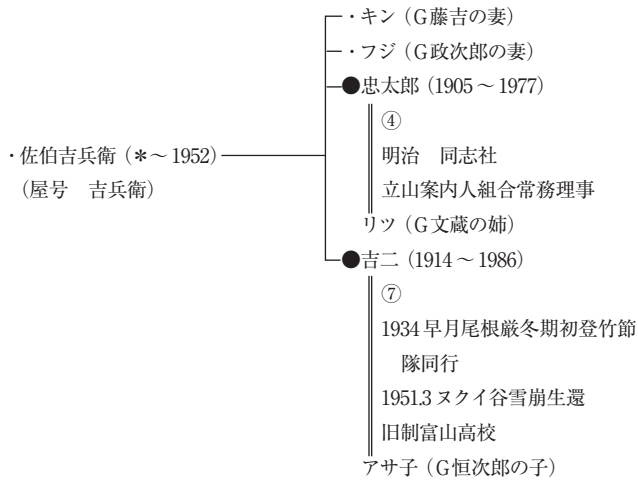




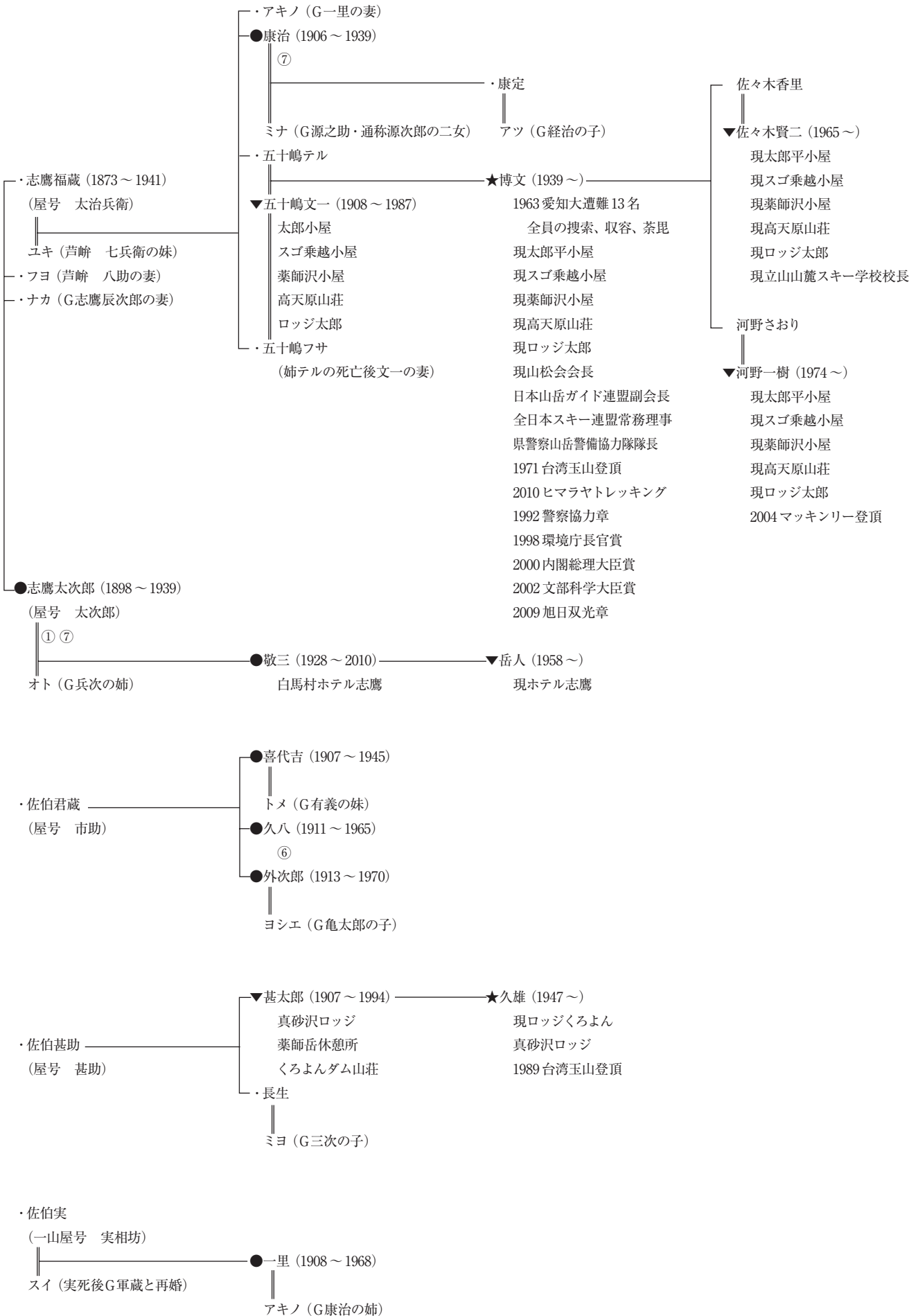


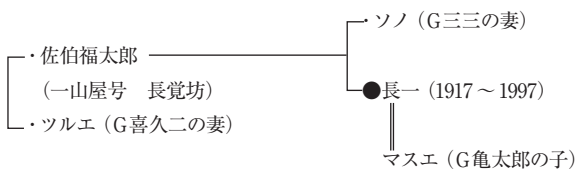
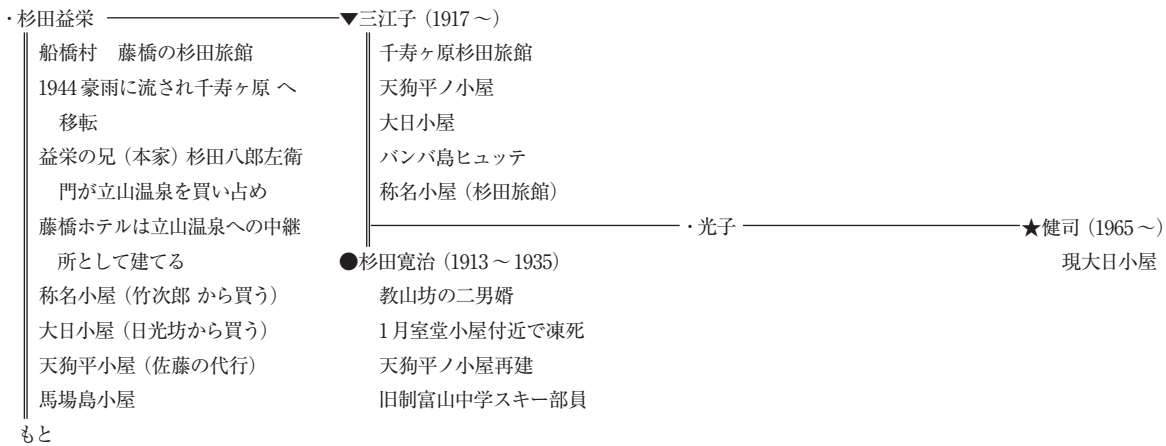
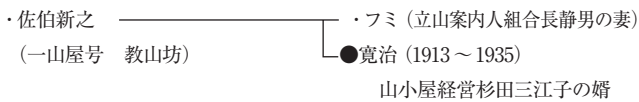
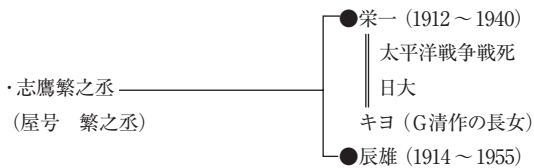
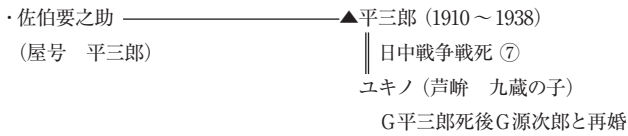
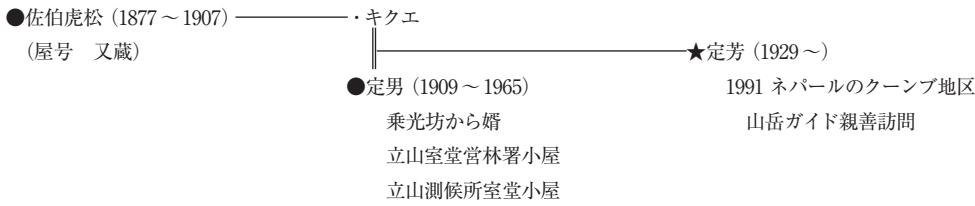
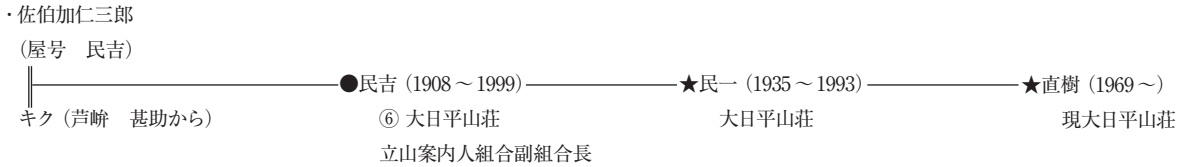






芦峯ガイドの系譜





○ 芦嶽ガイドまたは立山方面の山小屋経営・管理者（名義のみの場合あり）ではあったが、不明な点があり系譜に載せていない人びと。

- \* 佐伯直太郎 1906（明治 39）年 8 月、日本山岳会の大平晟を称名滝へ案内。猟師で当時 48 歳。中語ではなく称名川で小屋がけし、富山売薬の原料である木羽を製造していた。
- \* 志鷹仙次郎 1922（大正 11）年 8 月、今西錦司、西堀栄三郎の薬師岳金作谷初下降到平蔵、宮本金作、宇治音次郎とともに同行した。
- \* 佐伯暉光 1930・31（昭和 5・6）年、立山案内人組合代表者で 30、31 年に弘法茶屋を管理した。
- \* 志鷹竹次郎 一時称名ホテルの所有者。
- \* 『山日記』（1930 年より発行）に夏冬の案内人として載っている次の人びと
  - 佐伯亀治（1882・明治 15 年生れ）1930～34 5 年取載
  - 佐伯康光（1909・明治 42 年生れ）1940～43 終戦直前 3 年取載
- \* 『山日記』に夏山案内人として掲載されている次の人びと
  - 佐伯彗光（1895・明治 28 年生れ）志鷹六次郎（1904・明治 37 年生れ）
  - 佐伯 豊（1908・明治 41 年生れ）志鷹 敏（1910・明治 43 年生れ）
  - 佐伯竹蔵（1911・明治 44 年生れ）志鷹楽一（1912・明治 45 年生れ）
- \* 大学山岳部や伊藤孝一の山行に同行したことがある次の人たち
  - 佐伯龍二、志鷹黒兵衛、佐伯章作、志鷹度一、佐伯栄太郎、佐伯新吉、佐伯藤平

以 上